
テイルズオブジアビス 【ミュウの異世界冒険記】

にい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブジアビス 【ミコウの異世界冒険記】

【Zコード】

Z3028Z

【作者名】 にい

【あらすじ】

ヘルドラントの最終決戦から幾分か時が経過したある日。
ミコウはチーグルの森にて未だルークの帰りを待ち続けていた。
悲しみに耽るミコウ、そんな彼に突然運命の光が瞬く。
絶体絶命のピンチにミコウを救つた光とは

そんな有りがち設定ではありますが、ミコウの成長物語を最後まで見届けてくれると光栄です。

ちなみにこの小説も以前別のサイトにて投稿していました。
完結もしていますし、バックアップもそのまま残っているので、加
筆修正しながら投稿するだけの簡単な作業です。

第1話 いきなりピンチ！？ VS骨（前書き）

初めましての人は初めまして！
TOSからの人はこんにちは！

今回投稿させて頂くのは、今からするとちよつと古い（？）だけど
名作中の名作、ジアビスの長編です。

歩いて喋るソーサラーリングことミコウが主役の成長物語、最後まで見届けてもらえると光栄です。

第1話 いきなりピンチ！？ VS骨

よしつ！ お前は今日からブタザルだ！

大好きなご主人様が付けてくれた名前。

なんだとつ！ ブタザルのクセに生意氣なつ！

尻尾を振りまわしたり、頬を引っ張ったり、時々意地悪だったけど……

俺、変わるよ…… 変わりたい……

『変わる』と誓ったあの日から、前以上に優しくなつたご主人様。

よしつ、ミコウ！ 俺が合図をしたら火を吹くんだぞ！

一緒に戦つた日々、モンスターの威嚇や、障害を駆除するのが自分の役目だった。

そして……

ミュウ、お前は仲間たちの元へ帰れ。

それがエルドラントで訊いた最後の言葉……

それ以来、ご主人様は僕の前から姿を消した。

緑浴に満ちた幻想的な森林。

チーグルの森と呼ばれるその森林は、地名通り聖獸チーグル達が群れを成して暮らしている。

その最深部には堂々と聳え立つ巨木が存在する。

チーグル達はその巨木の中を住処に生活を送っていた。

チーグルは仲間意識の高い種族である。今までも協力し合って生活を送っていた。彼らに抗争と言う言葉は似合わない。

だが、そんな彼らの輪から外れ、ずっと悲壮な表情を浮かべながら黄昏れている一匹のチーグルがいた。

お腹に『ソーサラーリング』という貴重品を身につけ、青い毛をした子供チーグル

「あの子……森へ返つてきてからずっと元気ないわね」

「そうだね。僕達に何か出来ることがあればいいのだけれど……」

仲間のチーグル達が元気のないその子を見て、同情の眼差しを向ける。

「ずっと慕つていた主人が死んじゃったんだしょ？ 今はそつとじてあげておいた方が……」

茶色の毛のチーグルがその言葉を発したとき、ずっと仲間の言葉に無反応だった彼の長い耳がピクツと反応を示した。

そして彼 ミコウは威嚇するように毛を逆立てながら言った。

「ご主人様は死んでないですのっ！ 必ず生きて返つてくるって約束……約束を……」

言葉を詰まらせたと思ったら、ミコウは突然大粒の涙を流した。

「（約束……したはずですの……でも……どうして帰つてこないですか……？）」

ミコウには主人と慕う人間が居た。

主人の名はルーク・フォン・ファブレ。彼はとある技術で人工的

に生み出されたレプリカという存在だった。

オリジナルよりも力も劣る彼は、当時『自分の価値』を見失いがちであった。自分がレプリカだということを卑下し、悲観的になることもしばしばあった。

しかしミュウはそれでもルークを慕っていた。

オリジナルである男よりもレプリカであるルークだけを慕った。その一途な思いがどれだけルークの救いになつたことかミュウは知らないが、それだけルークのことが大好きだった。

そして数年前、ルークは栄光の大地エルドラントにて、ようやく『自分の生まれた意味』を見つけることができた。

しかしそれは自らの命に危険を侵すものでもあった。

ルークは、ミュウに、そして仲間達に必ず帰つてくることを誓い、崩れゆく都市の中で、光に包まれていった。

それ以来、ルークの姿は見ていない……

「……っ！」

ミュウは大粒の涙を浮かべたまま、ダッシュでその場を去つて行つた。

仲間達が静止するように声を上げていた氣もするが、感情的にはたミュウの耳には届いていなかつた。

「はあ……はあ……はあ……」

涙を風に靡かせ、地を濡らしながら、ミコウはただひたすらに走る。

仲間に涙を見られたくないわけではなかつた。でもなぜかあの場には居られなかつた。

ミコウはただ無心で走つていた　いや、どこでもいいから一人になれる場所を求めてひたすら走つていた。

「あ……あ……ふう～～」

住処とはかなり離れた場所でミコウは一息吐く。走つている内に涙は乾いていた。

しかし、渴いたのは涙だけではない。

「喉が渴いたですの～」

小さな身体で三十分近くも走つた為、ミコウの疲れはピークに達していた。

ミコウは近くの湖に身体を乗り出し、ちゅうちゅうと水を飲み始めた。

「……ふはあ～」

たくさんの水を身体に飲み入れたミコウは、そのまま水面に浮かぶ自分の顔をじっと見つめた。

その時に思うことも、たつた一人の「主人様のことだけ……

「（「）主人様……今、どこにいるのです？　会いたいです……今すぐにも　）」

そんな切なる願いを込めるミコウ。

「…………

その時、背後から足音に似た音が耳に入ってきた。

「（みゅみゅつ！？）この重みのある足音、冷たいようでもどこか暖かさを感じるオーラ…………ま、まさかっ！？」

ミコウはこの足音に聞き覚えがある。期待に膨らみを混めてミコウは静かに振り返った。

そこに居たのは

「主人様！ 帰つて……帰つてきてくれたですの
…………！」

ミコウはたまらず、背後に居た人影に抱き付いた。

「（主人様、ミコウはこの日をずっと心待ちにしてたのです、またお会いできてうれしいです、すりすり～です。ああ、このゴツゴツとした感触、たくましい腕、冷たい温もり、間違いなく）主人
だ！」

「…………

ミコウが軽く暴走モードに入っていた最中、人影は突然ミコウの

耳を引っつかみ、地面に思いつきり叩き付けた。

「い、痛いですの～。『主人様何するです……ああっ！？』

叩きつけられたことで少し平静を取り戻したミコウは、改めてその人影を見て驚きの表情を表した。

「お、お前は……」主人様ではないのですの～！」

ミコウ曰く、ゴツゴツとした感触、たくましい腕、そして冷たい温もりを持った人影は臨戦体制に入っていた。

どうやらミユウがいきなり飛び付いた行為が、この相手は敵意を持つていると勝手に勘違いしてしまったみたいである。

「お、お前は……たしか……死靈スケルトンですの～！」

死靈スケルトン、一言で言えば強暴な骸骨。

物理攻撃に耐性があるとは言え、水に弱いわ、風にも弱いわで、弱点の方が多く見積もられているという、言わば雑魚モンスター。

補足しておくが、ルークの容姿はこんな骸骨ではない。

共通点ゼロのスケルトンをどうやつたら自分の『主人と間違えられるのか、ミユウに問いたいくらいだ。

しかし、ミユウはそれどころではない危機に面している。

「みゅみゅ～っ！　！」は逃げるのです～！」

即座に背を向け、ダッシュで逃走に移るミコウ。

相手が弱点だらけの雑魚とはいえど、子供チーグルに勝てるほど甘い相手ではない。逃走と言つ判断は正しい選択だったのかも知れない。

だが、一度敵懶心を見せられたスケルトンもミコウの後を追い掛けてくる。鈍足そうな姿とは異なり、意外に足が早い。

でも、ミコウは足の早さだけは自信があった。こんな雑魚骸骨などすぐに突き放すことほんらい軽いはずである。

しかし、スケルトンと自分との差はむしろ詰まっていた。
どうやら先ほどの全力疾走の疲れがまだ残っているようであり、
足の節々に痛みが生じている。

「みゅみゅ～っ！　大体なんでスケルトンがチーグルの森にいるですか～？　あいつはアクゼリュス第14坑道にしか出没しないのはなかつたのです～！？」

ちょっととしたプチトログアをぼやきながら必死に逃げるミコウ。
一見、余裕があるように見えるが、実際はかなり切羽詰つていた。

「（）のままでは確実に追い付かれるですの……仕方ないですの……」
ミコウは覚悟を決めて、ミコウは戦うですの～）」

決意の炎を胸に抱き、覚悟を決めたミコウはクルリと振り向いてスケルトンの正面に対峙した。

「ふあいあ～っ！」

偶然にもミュウの突然の攻撃は不意打ちの効果を放つた。スケルトンは回避する間もなく、腹部にミュウファイアが炸裂する。

「グガうつ！」

スケルトンは奇声を上げるが、ミュウファイアが命中した腹部には特に損傷は見当たらなかつた。

ほとんどのタブレットを受け取っていない様子である

スケルトンは右手に構えた棍棒を振りかざし、一気に振り下ろす。ミュウはギリギリの所で攻撃を交わすと、再び背を向け全速力で走り出した。

半べそを描きながら、走るミコウ。

逃げられない 単死ない 怨い の三拍子が揃った
絶体絶命だった。

そんな絶体絶命のニユウの脳裏に浮かんだのは、かつての仲間達の姿だった。

「（ティアさん、ガイさん、ジョイドさん、アースさん、ナタリアさん！助けてですの……っ）」

ミユウは必死に心中で助けを乞う。何も出来ない自分の無力を

海がみなみや

そして、ミユウの脳裏に自分にとって一番大きな存在が浮かび上がる。

「（ご主人様……っ！ 助けて……ですのっ！）」

スケルトンはついに自分の間合いの中にミコウを捕えた。
今度こそ攻撃が当たると核心したスケルトンは棍を大きく振り翳す。

だがその時、ニコウの身体に異変が発せられていることに気が付いた。

ミコウのお腹に眩い光が発せられていた。

いや正確にいへど、三三七のお腹は着けている。袋食が光りを放つてゐる。

「（）」、「これはどういったのですかー？」ソーサラーリングが光つてゐるのですかー」

光は更に眩しく、そして強く、光を放ち続けている。

目を開けられないほどの光が辺りを包む。

るばかりであった。

そして爆発的な光がソーサラーリングを中心に放たれた。

ミコウの叫び声だけが、辺りに轟く。その叫び声は徐々に遠ざか

つて行くよつに聞こえた。

そして、瞬時に光は収まつた。

そこにはノウハウの姿が完全に消え失せていた。

ちい、座標がずれたか……

声がする。どこからするのかは分からぬ。

まあいい、この世界に転送は完了した。

だけど、その声は異様な威圧感を放つてゐる。絶対的な力を持つ者が放つ恐ろしいオーラ。

後は部下に回収を怠がせるとするか……

それつきつ声は聞こえなくなる。ほつと胸を撫で下りて、安堵する。

そしてノウハウの意識はゆっくりと回復していくのであつた。

第1話 いきなりペンチ！？ VS骨（後書き）

見てくれてありがとうございました！

それにしても40000文字制限はすごい！

これなら思ったよりも早く完結できるかもです。

第2話は明日投稿予定。1日1本上げることを目標に頑張っていきます。

第2話 めたもやペンチー？ 異世界は敵だらけ（前書き）

ソーサラーリングアクションはアビスが一番好きでした。
最近のテイルズはソーサラーリングすら無くなつちゃつて少し寂しいです。

第2話 もともやペンチ！？ 異世界は敵だらけ

「……みゅ？」

田を覚ました時、まず眼前に広がっていたのは雲で覆われた真っ白な空だった。

ゆっくりと上体を起こし、辺りを見渡す。

「みゅつー？　い、いじばりはどうのーーー？」

周囲に見えるのはゴシゴシとした岩石のみ、縁も水もないただ岩だけが存在する山脈だった。

デオ崎と似ているが地形が全く違う。少なくともさっきまで自分の居たチーグルの森ではないことだけは確かだった。

「ミコウはなぜこんな場所に居るのですの？　たしかスケルトンに襲われて、必死に逃げて、それからソーサラーリングが光つて……って、そうだ！　ソーサラーリングですのー！」

たぶん、事の発端は突然光ったソーサラーリング。ミコウはソーサラーリングに異常が発生したと考え、リングをまじまじと見つめる。

リングの異常はすぐに発見することができた。

「みゅつー？　な、なんですか？　これはっ！？　リングに付いている穴が増えているのですっ！」

ソーサラーリング　元々は三つの穴にそれぞれ音素の譜を刻むことにより、様々な能力を発する便利アイテム。

今までその力で難解なダンジョンを攻略してきた。

ミコウファイアを出すことができる 第5音素の譜。
ミコウアタックを使うことができる 第2音素の譜。
ミコウウイングを広げることができる 第3音素の譜。

そして、更に空洞の三つの穴が追加されていた。装備者のミコウ自身も見覚えがない穴。

よく見ると、リングの形 자체も大きく変わっていた。

「まあ、それはそれとして……」

何の問題解決も至つてないが、ミコウは『それはそれ』の一言で片付けた。

ぐう~

「お腹が空いたですの~……」

全力疾走一回の後に充分なお昼寝（気絶とも言つ）、ここまで条件が揃つたら当然次に来るのは空腹である。

だが、周りに人も居なければ、食料になりそうなものも見当たらぬ。あるのは岩石の山のみ……

なんて思つていると、後方から誰かが近づいてくる足音が聞こえてきた。

「みゅうううっ！ 人ですの！ 人がいるですの～！」

足音の正体を人影だと察したミコウは、大喜びで人影の元へと駆

け寄った。

「す、み、ま、せ　　」

その人影の姿を見て、ミュウは思わず凍り付いた。

先ほどのチーグルの森でもそうだが、ミュウは考え無しに行動を

起こす悪い癖がある。

ミュウは声を掛けたことをすぐに後悔した。

「みゅみゅみゅ～っ！　なんでレプリカナイトがこんな所にいるで
すの～！？」

近づいてきた人影の正体は、かつてルーク達を大いに苦しめたレ
プリカナイトの大群であった。

レプリカナイト　ＨＰが高い上、攻撃力、防御力も共にバカに
ならない強さを誇り、弱点も特にない上級部類の魔物。

ルーク達もかつてエルドラントやフェレス島廃墟群にて、こいつ
にはかなり苦しめられていた。

例え、先ほどミュウが苦しめられたスケルトンが10匹居たとし
ても、このレプリカナイト一匹にすら遠く及ばないだろう。

そのレプリカナイトが大群でいるのだ。絶体絶命とはこの状況に
こそ相応しい言葉である。

「え……えっと……ですの」

見ている。大勢のレプリカナイト達はミコウの顔をじっと見ている。

背中に冷や汗がダラダラと流れる。その勢いは徐々に増してゆく。

「…………りんぐ…………はつけん…………ほんぐ…………する…………」

レプリカナイト達のリーダー（？）らしき者が不意に口を開く。単純な単語の羅列だが、さすがのミコウにもその言葉の意味していることは分かった。

レプリカナイト達は一斉に剣を構え、剣先をミコウの方へ向ける。

「みゅつ！？ みゅみゅみゅつ！？」

明らかに相手は敵意を示している。敵意を持つていなければ剣を向けるはずがない。

「と、とりあえず……逃げるですの～～～！」

本日3回目の全力疾走。

だが、当然レプリカナイト達も追つてくる。

ナイト達はスケルトンよりも、そしてミコウよりも速かった。

「なんで最近の魔物達はこんなに足が速いのです〜〜〜！」

今度は大べそを描きながら一生懸命に逃げるニユウ。

チーグルは魔物ではないのか？ という素朴な疑問も浮かぶが、あえて今はそこに触れないことにしよう。

逃げる最中、ふと前方に今にも崩れそうな大きな岩脈が田に映つた。

ミユウはそれを見てある打開策を閃いた。

「（え、 そうですのっ！ あの岩脈の根元をミコウアタックで崩す
です。 そしたら崩れた岩石で追跡の足を止められるかもしね
いですのっ！）」

ミコウの見解は正しかつた。

岩脈は根元を崩すと、いつも簡単に崖崩れが起る。そうすれば確実にナイト達の足を止めることはできるだろ？
しかしそれはミコウ自身にも危険が及ぶことでもあった。

「（危険かもしないけど、今はそんなこと言つていられないです
の一、覚悟を決めて……せーのつー）」

ソーサラーリングの第一音素の譜が光る。するとリング全体が土色に変色した。

ミコウアタックを右脈の根元に向けて放とうとした瞬間、今度はリングに連動してミコウ自身の身体も土色に変色する。

「こんなのは初めてなことであるが、ミヒウはそれ以外の所で驚愕することになる。

ンツー！

「 」 」 」 」 」 」 」 」 」

異常な破裂音が辺りに木霊する。その音に驚き、レプリカナイト達は思わず足を止めた。

ていた。

今のアタックの威力は明らかに異常だつた。
いつもなら小さな岩を碎くことくらいしか出来ないくらいの威力しないはずなのに……

おし... おしゃー... ピン

ニコウが衝撃を与えた箇所を基点に、岩脈は少しづつヒビ割れが

そして

大きくヒビ割れた岩脈は一気に崩れ始めた。

「みゅー！？ みゅうううううう！」

〃ゴウの断末魔が響く中、レプリカナイト達は雪崩のように崩れ
てきた岩の下敷きとなっていたのだった。

「あ、危なかつたですの……」

レプリカナイト達が生き埋めになつた現場より遙か上空。
いち早く危険を察したミコウは、咄嗟の判断でミコウウイングを
広げ、上空へと避難していた。

「（それでも、今のアタックの威力は何事ですか？ あんな凄
まじい威力、今まで見たことがないですか？）」

〃ゴウはそんな考え事をしながら、羽（耳～）を羽ばたかせ、適
当に思ひがねの方向へ進んだ。

「（やippipp、ソーサラーリングに向か異変が起きてこるのです
… そうとしか考えられな ）」

考え事の途中で、ふと〃ゴウはある事實に気が付いた。

「みゅー！？ 向で〃ゴウは空を自由に飛べてこりますのー？」

〃コウの驚愕は当然である。〃コウウイニングは本来、『飛ぶ』といつよりは、『浮く』だけの力だったのだから……

つまり、上下に移動出来ても左右にはできないこと以外、何とも中途半端な力だったのだ。

しかし〃コウは今、自分の思うがままに空中移動を出来ている。決してただ風に流されているだけとか情けない理由などではない。

「？？」

頭にクエスショントマーケをいくつも浮かべて悩む〃コウ。
しかし、いくら悩んだといひでプチトマトサイズの脳ミソでは、
この難しい見解を導き出すことなどできつとなかった。

だが、〃コウにも一つだけ理解できたことがある。それは自分が一番肌に感じたこと……

「〃コウの……いや、ソーサラーリングの力がパワーアップしているのです……」

パワーアップした〃コウウイニングの力によりて、〃コウは樂々と山岳地帯を抜けた。

そして、お腹を空かせながら飛ぶこと數十分、ようやく街にしき景色が見えてきた。

「や、やっと食べ物に在り付けるですの。長かったですの。」

街を発見すると、ミコウは大喜びで急降下し、街の入り口の前で綺麗に着地した。

エンゲーブを彷彿させるような美しい農園が広がり、街の中央には噴水広場があるという豊かな街だ。

噴水広場の中央には、なぜか怖い顔をしたおっさんの石造がドーンと聳え立っている。

これさえなればとても好感の持てそうな街である。早速街へ入ると、住人達による手荒い出迎えが待っていた。

「おい、なんだアレ？ 変な動物がいるぞ」

街の子供の一人がミコウを指差しながら言つた。

「本当だ。モンスターには見えないな。サルか？」

「いや、あの顔はブタだろ？」

「サルブタっ！ あいつの名前はサルブタで決^定！」

ミコウは何もしていないので、続々と野次馬達が沸いてきた。

「違うですの！ ミコウの名前はブタザルですの！」

野次馬が勝手に付けた名前に文句を述べるミコウ。

『ブタザル』というのは主人であるルークがつけてくれた名前。名前の由来はルーク曰く『ブタとサルを足して2で割ったような顔をしているから』らしい。

そんな真意を知っているのかどうかは知らないが、ミコウはなぜかこの名前に執着している。

「おこ、サルブタ……」

「だから違うですのー。//コウの奴前せ

「これ食つか?」

そう言つて差し出しあがたのは、レーズン入りのクッキー。

「食べるですの~」

音符マークを付けてまで差し出されたクッキーに飛び付く//コウ。

「サルブタ、これも食え!」

「喉が渴いたでしょ? サルブタちやん、これを飲み

何もしていないのに、あちこちから押し寄せる食べ物のプレゼン
ト攻撃。//コウは頬を緩ませながらそれらを一つ一つ嬉しそうに受
け取つた。

「サルブタ、何か菓子をやつたらいいのにお菓子もあげるわ」

そう言つて男の子が差し出したのは、見るからに美味しそうなチ
ョコレート。

「(あ、あれは、チーグルの森で流行つているボール型チョコレー
ト(いちご味)ですのー。あ、あれは何としてもゲットしたいで
すの~)」

流行りの品を見るや、//コウの瞳に小さく炎が上がる。
決意に満ちた今なら、何でも出来そうな気がしてきた。

「一番、//コウ」とサルブタつー 口から火を吹くですの~」

『おお～っ！』と野次馬から歓声が上がる。ハコウはこの瞬間、自分の名前に誇りを捨てた。

ミュウは大きく息を吸い込み、力をためる。ソーサーリングの第5音素の譜が光り、ミュウの身体全体がリングに連鎖して赤く変色した。

ミコウは上空を見上げ、力を解き放つ。

「ふあいあ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～」

オオツ ! ! ! !

ミコウの口を基点に上空へ放たれた炎は、直径數十メートルの熱波を作り、物凄い勢いとスピードを保ったまま、雲の上へと消えて行つた。

Γ Γ Γ Γ

野次馬達は、その炎の威力と規模に圧倒されたまま、硬直した。

「（…）しまったですの……ソーサラーリングのパワー・アップのこ
とすっかり忘れてたですの～…」

後悔しても時すでに遅し。硬直状態である野次馬達の目は、脅威

のモノを見ているかのように引きつっていた。

「い、以上、ミュウの火吹きでしたの～」

苦笑いを浮かべながら一礼をするミュウ。

そして、それが起爆となつて、野次馬達の停止していた脳が再起動した。

「ば、化け物だあああああああああつ！」

「やつぱりモンスターだつたんだ！　おい、保健所……じゃない、警備兵を呼べ！」

「この姿は我々を油断させるまやかしに違いない！　きっと正体は火吹き竜か何かだ！」

武器を用意していく者、兵を呼びに行く者、石を投げてくる者、街人達は一丸となり一匹の共通の敵を前に行動を起こした。どうやら仲間意識の高い街みたいである。

本来ならば美しい人間愛に満ちている街と言つべきだが、ミュウにしてみればただの早とちり集団でしかない。

まあ、こうなった根源はミュウにあるわけだが……

「みゅうううううううううつ！　ち、違うですの！　誤解ですの！　皆さんに危害を与えるつもりは……ふがつ！」

必死に弁解も虚しく、一人の子供が投げてきたボール型チョコレート（いちご味）がミュウの鼻の中に見事命中した。

それに続き、街人達の怒涛の投擲攻撃が押し寄せてくる。

耐久力の低いミュウにとつては、石をぶつけられるだけでも大怪我を負いかねない。

さすがにもうこの場に留まることは不可能と察したミュウは、慌

「 ハコウウイングを広げた。

「 みゅみゅううつー、『、『めんなさいでーすーのー！』」

悲鳴に近い謝罪の言葉を残し、ハコウは慌てて飛び立ち、街を後にしたのだった。

第2話 またもやペンチ！？ 異世界は敵だらけ（後書き）

見てくれてありがとうございます！

今更ですけど文章見づらいのかもって思いました。
行間を挟んだ方がいいのかなあ……

その意見も含めて感想も待っています。

第3話 やっぱりペンチ！？ VS 黒い人（前書き）

全く関係ないですけど、TOXの長編はまだ執筆に入れていません；

とにかくようやくプロットの作成に入った段階です。
ミュウの異世界冒険記が終わることに少しは執筆進んでいればいい
のですが（汗）

第3話 やっぱりピンチ！？ VS 黒い人

「つたく、ヴァーゲスト様も適當だよな。この世界のどこにあるソーサラーリングって物を持つて来いだなんて……」

怪鳥フレスベルグにまたがり、大空を飛んでいる黒い鎧の男は面倒そうにぼやきながらため息をついた。

黒い鎧、黒い髪、黒いフェイスマスク、黒い槍……黒以外の色が見つからないくらい、全身真っ黒な装備で覆われたデーモン族の男、名はアザゼルといった。

「大体、先に探しに出向いたはずのレプリカナイト達はどうしてんだよ……あ～あ、面倒くせえ」

男はダルそうに欠伸をすると、ついにはフレスベルグの上で寝転がってしまった。

「『』の世界のどこか』ってどれだけ範囲が広いんだつーの！
全く……見つかるわけが
「こんにちは」ですの」

不意に背後から飛んできた妙な生き物に話し掛けられ、挨拶を交わされた。

「あつ、ども。こんにちは」

アザゼルも寝転がつたまま、適当に挨拶を返す。するとその生き物は嬉しそうな笑顔を浮かべ、自分を追い越して空の彼方へと消えて行つた。

アザゼルはその方向をポーっと眺めながら、感心したように「う
言葉を漏らした。

「最近のサルは空も飛ぶんだな……」

「……って、サルが空を飛ぶか～～つ！」

ガバッと身を起こし、自分のボケに自分でツッコんだアザゼル。
「大体、あのサル。なんで言葉を発することが出来やがるんだ！？
俺の知らないうちに最近のサルは喋ることが出来るようになつて
いたつてのか！？」

レッサー　ンダが立つくらいで騒がれるくらいである。
どこの調教師が話題を集める為にサルに言葉を教えたという可
能性も

……

「……って、んなわけねーだろ！ しつかりしろ、俺ー！」

周りに「ツッコんでくれる者がいないことが、こんなにも寂しいことなのだと認識した瞬間だつた。

「そりいえば、あのサル……腹に珍しい装飾品を付けていたなあ……まるでリングみたいな……」

……

34

「……って、アレがソーサラーリングだあああああああああああああああああつー！」

アザゼルは慌ててフレスベルグに命令を与え、妙な生き物 ミュウの去つて行つた方へ向けて、全速力で追い掛けていつたのだった。

「みゅううう、いつまで経つてもどこまで飛んでも、知っている場所が見えないですの~……」

空を飛んでいる時のミコウは、リングの第三音素の譜の輝きと連鎖して身体全体が緑色に変色している。パワーアップしたミュウウイングの扱いにもようやく慣れしてきた様子のミコウ。上空移動はそんなに疲れないのにかなりお気に召したようである。

「……………てええええええつー！」

「みゅ~？」

背後に声がした気がした。

今までの教訓から、背後からやつてくる人影は自分にろくな結果をもたらしていない。

ミコウは思わず警戒体制に入った。

「まてええええええええいいい！ そのサルううううううううつー！」

「みゅ~？ サつきの黒い人ですの」

正確に言つと、人ではなくデーモンだつたりするが、ミコウはそのことに気付いていない。

男の表情からは、何か尋常ではない様子が伺えた。

「どうしてたゞすの~？」

まだ距離があつた為、大声を上げて訪ねるミコウ。すると男は

「みゅみゅうつ！？」

物凄いスピード、そして物凄い形相で男は近づいてくる。

「おぬしの心」

ミコウは慌てて背を向け、フルスピードで逃走を図った。

「までえええええええつーー！なぜ逃げるうううううううーー？」

聞く耳持たず、ミュウはウイングのスピードを上げるために全神経の力をリングに注いだ。

ペー^ドは最高点に達する。
すると徐々に加速度が上がって行き
やがて!!! ハーフマインクのス

「無視かよつ！……つーか、速えつ！ メチャクチャなスピード
じゃねえか、あのサル！！！」

男 アザゼルがまたがつているフレスベルグはすでにフルスピードを保っていた。

しかし、それでもミコウとの差は徐々に開いてきている。このまま行けば確実に見失つてしまふ、そう思つたアザゼルはため息を吐きながらしぶしぶその場に立ち上がつた。

「仕方ねえ。面倒くせえが、このまま逃がすわけにもいかねえからな」

立ち上がったアザゼルは両手を前に突き出し、目を閉じながら譜術の詠唱に入った。

「喰らいやがれっ！ ……フレイムバーストっ！」

アザゼルの両手から炎の譜が浮かび上がる。やがて譜の中心から強大な炎が浮かび上がり、瞬時に形を作った。そして大きな渦と化した炎が、ミコウの後部を目標に猛りを上げる。

「みゅつ！？ みゅううううううつ！…」

物凄い勢いを保った炎は、ミコウの飛んでいった方角を目標し、風を切つて迫つてくる。

慌ててウイングの軌道をずらして回避を試みるが、攻撃に気付くのが遅すぎた。

そして

ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンっ！

「みゅううううううううううううううつ……」

ミコウのウイングの片翼に炎の渦が命中した。

『熱い』というより『痛い』と言つた方が感覚的に正解だった。

そして片翼を動かせなくなつたミコウは一気に浮力を失い、そのまま森の中へと墜落していくのだった。

「ちつ、直撃は間逃れやがったか……まあいいか、サルは落としたし」

アザゼルはフレスベルグの動きを止めると、ミュウが落ちて行った森をじーっと見つめながらこりつ咳いた。

「しつかし……落としたのはいいが、この森　いや、樹海だな、これは。これから落ちたサルを探し出すのもまた一苦労だな。面倒くせえ」

どうやらアザゼルの『面倒くせえ』は彼の口癖のようである。

彼の無頓着な性格が口癖になつてよく表れている。

しかし、彼は面倒くさがっている割には、結局のところ責務はちゃんと果たすのである。

アザゼルは物凄く嫌そうな顔をしながらも、しぶしぶコウが落ちて行つた付近の樹海へと飛び込んで行つた。

「むつ……あれば……」

アザゼルが森へ飛び込んで行く様子を偶然遠目で見ていた女性がいた。

「確かに、ヴァーゲストの側近の男……なぜ、このような樹海に……？」

金髪の女性はアザゼルことを知つているような口振りだった。
獲物を威嚇するかのような鋭い眼光から、どうも彼のことを好意的に見ていないうだ。

「行ってみるか……」

決意を固めた女性は腰から二丁の譜業銃を取りだし、辺りを警戒しながら深い樹海の中へと足を踏み入れていったのだった。

第3話 やっぱりピンチ！？ VS 黒い人（後書き）

見てくれてありがとうございます！

今回は短いかもしませんがこれで終わりです。
明日もたぶんこのくらいの時間に更新します。

第4話 早矢の再会（前書き）

こんな駄文の小説をお気に入り登録してくれた方がいるよ！ついでっ！ とてもとても嬉しいです。本当にありがとうございます！！ 素直に励みになりました。これからも更新がんばっていきます！

第4話 早すぎる再会

「みゆい、今、何、か、思、う、て、な、ら、ぬ、」

アザゼルに討たれたミコウ。悲鳴がエコーとなつて響いたが、やがてそれも止んだ。

ドバッシャ~~~~ンフ！！

豪快な水音が響く。

不幸中の幸いと言うべきか、落ちた場所は大きな湖の中心部だった。よって、落下によるダメージは小さくて済んだ。本来ならば大事に至らなかつたことを喜ぶべきだが、今のミコウには素直に喜べない理由があった。

「（ふくふく）……泳げな……（ふくふく）……誰か助け……（ふくふく）……ですの~」

必死に足をばたつかせ水面に顔を出そうと一生懸命のミコウ。まだ子供チーグルであるミコウは泳ぎ方を知らなかつた。

「（ふくふく）…………」、根性…………（ふくふく）…………であつての（ふくふく）…………何とか崖まで…………（ふくふくふくふく）…………」

助けを乞つても誰も来るはずが無いことを悟つたミコウは、何と

か自力で岸まで泳ぐことを試み始めたのであった。

岸までほんの三十メートル程であつたが、ミコウには数百メートルの距離に見えたに違いない。

「はあ……はあ……はあ……はあう～～、や、やっと岸に辿り付いた……ですの～」

ようやく地に足を着くことができると、ミコウは水に濡れた犬みたいに身体をプルプル振って水氣を飛ばした。

泳げないミコウを救つたのは、例の形が少しおかしくなったソーサラーリングである。

別にまた不思議な力を発したとかそういうわけではなく、ただ単に浮力の働いたリングが偶然浮き輪変わりになり、泳げないミコウでもバタ足のみで岸に辿り付くことができたのだ。

「そ……それにしても今日は厄日ですの～。怖いモノに追われてばかりですの～」

スケルトン、レプリカナイト、そしてアザゼル。

今日一日だけでミコウは三度も絶体絶命の淵に立たされたのだ。しかも襲われる度に相手は強い者へと変わってきている。

この後、また何かに襲われたらと思つと背筋がぞくつとする。

「みゅうううう……耳が痛いですの～」

先ほどアザゼルの譜術がまともにウイングへ命中していた為、左耳にうつすら黒い傷跡が残っていた。

耳につつすら黒い傷跡が残っていた。

大事には至らなかつたが、その傷口は結構深い。とても再びウイングを広げられそうにはなかつた。

当然ながら、ミリウには回復薬術は使えないと、それどころか回復アイテムすら携帯していなかつた。

「仕方ないです。歩いて森を抜けるしかないですね」

「この場に居ても、またあの黒い男に襲われ兼ねないと思つたミコウは、ケガをした左耳を引きずりながら、よろよろと湖を後にしたのだった。

ミコウの予想通り、その場を離れていつた自分と入れ違いに、フレスベルグに跨がつたアザゼルが空から降下してきた。

「ちつ、水しぶきの音がしたからこゝだと思つたんだが……いねえか」

ミコウの運が良かつたのか、アザゼルのタイミングが悪かつたのか、湖に降り立つアザゼルの視界にミコウの姿はなかつた。

「この樹海じゃ空から探すのは無理だな。しかたねえ、面倒くせえが歩いて探すしかねえか」

そう呟くとアザゼルはフレスベルグから降り、地に足を着いた。相当、ダルいのか、肩を「キコキ鳴らし、欠伸を交え、ついには尻を搔きながら、ゆつくりとした足つきで樹海の中へと姿を消した。

ちなみに命令を受けていないフレスベルグは、主人の命が下るまで、いつまでもその場で待機し続けるのであった。

夕日が傾き始める。

この時間になると、この森の植物達はオレンジ色の光を浴びて、黄金色の草花へと変容する。

それは強暴なモンスターですら魅了されるほど、幻想的で、そして美しい光景だった。

その光景を見た者達は必ず何らかの情緒を感じるという。素直に感動する者も居れば、寂しさを感じる者も居る。今のミコウはその後者だった。

この光景はチーグルの森でも毎日のように見れた。いや、チーグルの森でなくともこの夕日が作る幻想世界は大好きだった。森の仲間達が……共に旅をした仲間達がいつも近くに居てくれたから……

共に感動できる者が常に隣に居てくれたから……寂しさを感じないで済んだから……夕日の景色が大好きだった。

だけど、今のミコウはたった一人。この黄金色の世界にたつた一

人でいることを強く実感した。

それと同時に仲間達の存在が、如何に大きいものであつたかを改めて認識した瞬間でもあつた。

「「はあ～……」」

場の雰囲気にそぐわない『一いつ』の深いため息が綺麗に同調した。そしてそれぞれのため息の主達は、肩を並べて交互に愚痴を語らう始めた。

「全く、あの黒い人までもリングを狙っていたなんて聞いてなかつたのです……」

「全く、ソーサラーリングが動いているなんて聞いてなかつたぜ……」

「早い内に安全な場所に避難しないと、また別の誰かに襲われるかもしれませんのです……」

「早い内にあのサルを見つけねえと、他の奴に先を越されちまうじやねえか……」

「大体なんでリングが狙われるのです？」

「ああ、それはリングを見付けたものだけに特別に装置を使わせてくれるというヴァーゲスト様の粋な計らいが……」

「　　ん？（みゅ？）」「

幻想的な世界に魅了されていた二人は、この瞬間まで肩を並べて歩いていたことに全く気付いていなかつた。

一人のボケが見事に同調した、あまりにも間抜けな再会だった。

「てめえ、いつの間に俺の隣にっ!? ちつ、俺に気配すら感じさせないとは……見た目とは違い、なかなかやるようだな! サルつ!

慌ててミコウとの間合いを取り、槍を構えて牽制するアザゼル。ちなみに気配を感じられなかつたのは、単にアザゼルが夕日に魅せられてボーッとしていたことが原因だつたりするが……

「（な、何でこの人怒つてるですかー！？）」
「わが分からぬですの

アザゼルの言つていぬことはただの言い
ミコウからしてみれば、
がかりである。

事実、ただの言ひがかりなのだが、アザゼルの独特な臨戦オーラに圧され、ミュウは反論できずにいた。

目を見るだけでわかつた。この男の奥底に見える圧倒的な力が……本物の強き者は、武器を構えただけで相手を奮い立たせるような

オーラを放つ。

六神将やヴァン総長がそうだったよ！」

しかし、そのオーラを感じていたのは//コウだけではなかつた。

「（なんだ？）こいつの奥底に感じる強大な力は？　リングの力が
サルの身体に向調してやがるのか？」

相手は自分を見てこんなに怯えているのに……相手はただの小動物のはずなのに……アザゼルの槍を握る手に汗がにじみ出していた。

「（ひつ、何だかしらねえが、戦うと面倒なことになりそうな気がするぜ……仕方ねえ、こいつにはあまり好みはしねえんだが……）

「

何を思ったのか、アザゼルは構えていた槍を背中にしまい、臨戦体制を解いた。

「おい、サルっ！」

「みゅううつ！//コウの名前はブタザルですの！」

「同じようなもんじゃねえか！　キレる意味がわからんねえし！
…まあいい。おい、サル！　俺と戦いたくねえか？」

一見挑発しているようにも取れる言葉、アザゼルはまあ//コウに戦意の有無を確かめる質問を投げた。

「戦いたくないですの」

「即答かよ……まあいい。戦いたくねえんだな」

「戦いたくないですの」

「（一回言つたつ！？）……そ、ですか……じゃあ、その腹に着け

ているリングを俺によこせ。そつすれば俺もすぐこここの場から消えてやる。お前の命も見逃してやる

「それは困るですの～」

ミコウはお腹のリングを『渡してたまるか』と言わんばかりに、小さな手で押さえつけ、大事そうに抱え込んだ。

ソーサラーリングは単に火やアタックを出せるだけのアイテムではない。人と話すための翻訳機変わりにもなっているのだ。つまりソーサラーリングを失うことは人との意志の疎通が取れなくなるということ……主人やその仲間達とも話が出来なくなるといふことも意味していた。

「よし、じゃあこいつようじゅねえか

アザゼルはにやりと口元で笑みを浮かべると、ミコウにある打開策を持ち掛けってきた。

第4話 早矢の再会（後書き）

見てくれてありがとうございます！

言われるまでもないと思いますが、アザゼルはオリジナルのキャラです。

今、『アザゼル』ってきくと、『○んどうすよ、アザゼルさん』の方を思い浮かべてしまつ…。w
アニメ、よかつたなあ。

第5話 魔弾襲来（前書き）

たぶん、僕はこのサイトの仕様を半分も使いこなせていない気がします。

イラストを挿絵みたいに使っているアレはどうやらんだろ？……

第5話 魔弾襲来

「サル……お前、俺と一緒にこないか?」

その打開策はミコウにも想定外だった一言。

ミコウが目を見開いて驚くほど意外な一言だった。

「リングを渡したくねえなら、お前も一緒に来ればいい。俺の目的が果たされるまでお前の身柄は保証する。どんな敵からも守つてやるさ」

「みゅみゅうつ！？」

さらに意外なことに、それはなかなか魅力的な提案だった。

今日だけで三回近くも敵に襲われているミコウにとつては非常にありがたいものであり、心強い。

ミコウの心境は今大きく揺らぎ始めた。

この男に完全に気を許したわけではない。

しかし、これ以上この見知らぬ土地で一人でいることは嫌だった。

そして、ミコウの決断は下つた。

「分かりま　」

「……ホーリーランス！　」

「　……つー？　」

ミコウがまさにアザゼルに気を許そうとした瞬間、近くの叢から

光の矢を降らす譜術が放たれてきた。

光の矢はアザゼルの右肩に深く突き刺さった。

あまりにも突然な奇襲だったので、さすがの彼も避ける間もなかったのだ。

「くつ！ 何者だ！？」

肩に手を沿え、痛がりながらも、叢にいる奇襲者に呼びかけるアザゼル。

しかし、すでにそこには誰も居なかつた。

「みゅみゅうつ！？」

後方でミュウの悲鳴が上がる。

アザゼルは慌てて振り向くと、そこには金髪の女性がミュウを抱え、尋常ではないスピードで連れ去ろうとしていた。

「ちいっ！ させむかよ！ ……光龍槍つ！！」

アザゼルの黒槍が無光属性の光線を放つ。

突き出された黒い光線は、奇襲者の後部目掛けて真っ直ぐ発射されていた。

しかし、奇襲者の次なる譜術詠唱はすでに唱え終えられていた。

「レイジレーザーつ！」

奇襲者の右手から、前方に貫通する眩い光線が発射された。

無光属性と光属性の光線同士がぶつかり、共に威力を中和し合いつ。

そして、ほんの一瞬だが爆発的な光が辺りを照らし散らした。

バンツ！ バンツ！

光に目を取られていた隙に、二つの銃声が鳴り響いた。アザゼルは自分が撃たれたと思い、即座に身構えるが、自分の身体には特に『撃たれた』という反動はこなかつた。

変わりに

スミテルス

二
！

自分の左右に聳えていた一本の木が自分を挟むように倒れてきた。絶大な威力を誇る二丁の譜業銃から放たれた弾は、腐りかけていた木の根元を燃やし、アザゼルの頭頂へと倒れこむように仕向けていた。

まさに計り知れない銃の腕と、物理法則を瞬時に計算できる頭脳を掛け合わせた見事な攻撃だった。

スガ
ンテ!!

豪快な音を立て、根元を焼かれた一本の木は、アザゼルを下敷きにして彼を挟むように倒れたのであつた。

「みゅ～～～～～うつ！ みゅつみゅつ！ みゅみゅ～～～～」
～～～～うううつ～！」

いきなり連れ去られたミコウは、金髪の女性の信じられないほどスピードを保った激走に、目を回しながらひたすら悲鳴を上げまくった。

「静かにしろ！ タつきの奴にこの場所が気付かれるだろ？ がつ！」

金髪の女性に叱咤を受け、少し静かになるミコウ。
それでもジエットコースターみたいな激走には悲鳴を上げそうになる。

女性は先ほどの攻撃でアザゼルを仕留めきれていないと前提みたいな表現をする。

彼女は彼の実力をかなり高い評価で見ているらしい。

ようやくジエットコースター感覚に慣れてきたミコウは、ここでも初めて女性の顔をちらりと見た。

「……っ！？」

そこにはとても意外な、そして懐かしい人物の顔が在った。

「あ～、いたえ。思いつきり頭打つたじゃねえか」

一本の木に下敷きになつたはずのアザゼルは、まるで何事もなか

つたかのように木を払い除け、脱出に成功していた。

しかし、その表情には危機迫る雰囲気を漂わせており、明らかに怒りを奮闘させていた。

「あの女、絶対許さねえ。おい！ フレスベルグ！ 空から追跡するぞ！」

……………

「おい、フレスベルグ！？ てめえ、聞いているのか！？」

……………

……………

「……………って、あ～～～！ フレスベルグを湖に置いてきちまつたあ

ああああああっ！－！」

今の今までフレスベルグが傍にいなかつたことに気が付かなかつた
アザゼル。

フレスベルグは今も湖で彼の帰りをいつまでもいつまでも待つて
いることだらう。

「よしり、ここまでくればさすがの奴も私達を見つけられまい」

女性はあれから約1時間弱、休憩無しに樹海の出口付近まで走り続けた。

女性とは　いや、人間とは思えない程の体力の持ち主である。しかも本人は終止涼しげな表情を崩さず、疲れた様子を一切見せていなかつた。

女性とミコウは出口近くの洞窟に身を潜めている。

仮にアザゼルが空から追跡したとしてもこの場所なら見つかることもないだろ？

「なんで……なんであなたがこんな所にいるのですの？」

ミコウにしては珍しく真剣な表情で、女性に質問を掛ける。

「そんなことよりもお前、そのリング　」

「今はこっちが質問をしているのですのっ！…」

更に珍しいことに今度は叱咤するミコウ。

ここまでシリアスなミコウは果たして年に何回見られるだろうか？

「分かつた、先に質問に答えよ？　あの黒装の男は、私が今調べて

いる重要参考人の一人なのだ。そして、先ほどあの男が森に入つて行く姿を見たものでな……気配を消して後を

「そうじゃないですの～っ！」

バチンバチンっと、小さな手で地面を叩いて苛つくミコウ。

どうやら彼の聞きたいことは別にあるらしく。

「どうして死んだはずのあなたが、忽然元気いっぱいにして生きてい
るかを聞いているのです〜！」

「……お前っ、ティア達と一緒にいたチーグルではないか！」

公理化の歴史

女性はようやくその事実に気付くと、初めて表情を崩し、驚きを見せた。

「なぜ、お前がこんな所に？」

だから、今はHagaが質問しているのです！

お互いに聞きたいことが多すぎて混乱を招いている。そして、ついにミコウが叫んだ。

「だから、何で死んだはずのリグレットさんが生きているのです〜

第5話 魔弾襲来（後書き）

見てくれてありがとうございます！

次回から後書きでちょこちょこひとつスキット（TOAではフェイスチャットだけ？）を入れていきます。
ちょっとしたお遊びみたいなもんです。

第6話 グラン・ソウル（前書き）

世界観の説明とリグレットのシンデレラ回です。
世界観の方は5秒程度で思いついた有りがちすぎる設定です。
なんかのアニメでこんな設定の世界があったなあ……題名忘れたけ
ど

第6話 グラン・ソウル

ローレライ教団兵『神託の盾騎士団』^{オラクル}の幹部『六神将』。並外れた実力を持つ六人で構成され、その個々の力は圧倒的であった。

皆、それぞれに思念を抱き、過去にルーク達と何度もぶつかりそして破れた。

そして、この『魔弾のリグレット』と称された女性も、栄光の大エルドラントにて、過去の教え子であるティアと価値観を噛み合わせぬまま敗北し、命を落としたはずである。

「お前、この世界のこと何も知らないのか？」

「みゅうっ！ ミコウだって世界のことくらい知っているですの！」この世界はオールドラントと言つて、キムラスカ国とマルクト国を中心に平和を守つてゐるのです〜」

かつては平和条約で結ばれていた二国は、表面的だが友好を保つていた。

しかし、ある事件をキッカケにその平和条約は解消され、対立国として永きに渡つてきた。

だが、ルークを筆頭にその仲間達の提案で、再び同盟は結ばれた。今度は表面だけの友好ではなく、互いに手を取り合い、永久に協力し合う誓いが交わされ、オールドラントに更なる平和が訪れた。

ミコウの説明はものすく手抜きではあるが、言つてることは間違つていない。むしろミコウにしては博学な言葉を口にした方だらう。

だが、リグレットはミコウの解答を聞いて、なぜか深くため息を

吐いた。

「なるほど、何も分かっていないみたいね」

「みゅみゅつー?」

いつもあつた自分の意見が覆され、驚き半分、くみ半分のリアクションを返すミコウ。

そしてリグレットは更に驚きの事実を述べ始めた。

「この世界はオールドラントではない」

「チーグル、お前は人が死した後、どこへ行きつゝと思つ?」

不意に放たれた質問、それは哲学の域を越した高度な質問 そして、誰もが知りたいことでもあつた。

ミコウは眉を寄せ、『むむむ』と唸りながら、じつくつと血分なりに考えをまとめ……答えた。

「火葬場ですの~」

なぜか嬉しそうに答えるミコウ。

その解答を聞いてリグレットは一瞬口をついてなる。

「そうじゃなくて……いや、その通りなのだが……し、質問を変えよ!」

リグレットは「ゴホン」と咳払いを入れ、間を作ると、改めてこうつ質問をした。

「人が死に、肉体を離れた魂の行き付く場所、それはどこだと思つ？」

博識なリグレットとしては非常に分かりやすく質問したつもりだが、ミコウにはこれでも質問の主旨が理解できていなかつた。

「墓地ですの～」

一度田のミコウのボケ解答に、リグレットは鎮痛の表情を浮かべる。

結局彼女はミコウの言葉はスルーして、話を先へ進めることになった。

「……つまり、この世界は生前に思念を果たせなかつた魂が行き着き、生前の肉体へと再構築される場所、それがこの死靈世界『グラント・ソウル』よ」

「みゅ？」

長い間の後、ミコウは思考の末、結局首を傾げた。
まだよく分かつていないみたいである。

その反応に、非常に疲れた表情でため息を漏らすリグレット。

「もういい。つまり、この世界は異世界なの。今はそれだけ覚えて
もうええばいいわ」

結局の所、ミコウにも分かるように簡単な説明で済ますリグレッ

ト。

その口調にはいつも堅苦しい軍人らしさは見えず、素のリグレットを映し出していた。

「みゅうう。よく分からぬけど、わかりましたのです～」
「（）（）（）まで簡単に言つても分からぬことは……」

じつやら博識なリグレットにとつて、ミコウとこうの存在は苦手意識を持たせる相手らしい。

久方ぶりにじつと疲れたリグレットは、机の壁に背をあずけ、しばらく火の番に集中することにした。

田は完全に沈み、夜の深い闇の中、静寂と獣の咆哮が交互に樹海の音帯を支配していた。

ミコウ一人だつたら怯えて震えていたかも知れない。

しかし、今のミコウにはその恐怖感に襲われることはなかつた。

「チーグルよ。勝手に連れちりてきてしまつた手前悪いのだが、お前を『モーヴ』という都市に連れて行きたいと思つ。こつちの勝手な都合だが――

「分かつたですの～」 リグレットさんに着いて行くですの～

リグレットが話を言い終える前に、ミコウは即了承を下した。
この反応にはさすがに意外だったのか、リグレットは田を見開いて、驚きを表情に出していた。

そしてリグレットはすっと氣になっていたことを聞いてみる」と
にした。

「お前、なぜ、かつて敵だった私を見ても警戒しない？ アレだけ
お前達の行く手を阻んできたといつに」

そう かつてルーク達と六神将は互いに剣を交えた宿敵同士、
つまりミコウとも敵対関係であったはず。

なのにもミコウは警戒する所か、完全に心を開いていた。

ミコウはリグレットと真っ直ぐ向き合ひ、笑顔を向け、心意を
述べ始めた。

「ティアさんが言つていたのです。リグレットさん本当にとても
強く優しい人で、最も自分が尊敬している人だつて

「ティアが……？」

「ミコウもそう思つですの~ リグレットさん、とってもどつて
も優しいですの~」

屈折の無い笑顔で本心を述べるミコウ。

リグレットはその言葉を聞いて、少しだが頬を赤らめた。

「なつ……わ、私がいつも前に優しくした！？ 心にも思つてない
ことを言つなかつ！」

「そんなことないのです。リグレットさん、ミコウに一生懸命こ
の世界のこと教えてくれたのです」

「その割には全然理解していなかつたではないか！ も、もういい
！ 寝るぞ！ 明日は早いんだ！」

なぜ明日『早い』必要があるのかは全くの謎だが、リグレットは
ミコウに背を向けるとそれっきり黙りこくつてしまつた。

ミコウはそんなリグレットの様子を見て一瞬微笑むと、その場にゴロソと転がり、すやすやと寝息を立て始めた。

久々にミコウに『えられた安らかな時間。
背中に感じられた安らかな温もりは、決して氣のせいなんかではないだろ。』

朝日が登り、森に咲く草花に太陽の光が降り注がれる。

朝の森は自然の贊歌のように澄みきった水のせせらぎの音がよく聞こえて来る。

リグレットはその音が目覚ましとなつて、ゆっくりと眠りから覚めた。

彼女は髪を束ねながら、ちらりと横田で隣で寝ているミコウの姿を見た。

「（ガアーゲストの側近の男は明らかにソーサラーリングを狙っていた……なぜだ？ なぜアレほどの男がこんなリングなんかを欲しがるのだ？）」

しばらぐじーっと見つめていると、ミコウは一つ寝返りを打つ。すると、ミコウの左耳に黒いアザがあるを見付けた。

「（なんだ？ ケガをしているではないか……あの男にやられたのか？）」

田に飛び込んできたのは、空中でアザゼルからフレイムバーストを受けた時にできた傷跡だった。

一日で痛みは引いていたが、火傷の跡はじりじりと残されていた。

髪を束ね終えたリグレットは自分のカバンの中をじりじりと漁り始めた。

その時、ミュウも静かに田を覚ました。

「みゅうう～、おはようですの～」

「田が覚めたか。おい、ちよつとじつとじつにい」

「みゅ？」

リグレットの促された通りコロウはその場でじつと固まってみた。

カバンから包帯と薬を取り出したリグレットは無言でコロウの左耳の傷に手当てを始める。

「みゅみゅつ？ 手当てしてくれるですか？」

「じつとじつると言つたはずだ、口も動かすな」

リグレットの手当ては動きに無駄がなく、尙ほつ一寧な治療だった。

いつも言つた治療は慣れているのか、わずか数秒で完璧な包帯の形が出来上がった。

「みゅみゅ～う、ありがとうございます～。やつぱりリグレットさんは優しいですの～」

「ち、違うー その汚らわしい傷跡を自分の視界から消したかっただけだ！」

明らかに照れ隠しが混じった言い訳を述べるリグレット。頬もほんのり赤い。

ミコウが改めてリグレットの優しさを感じた朝の一時だった。

「モーグはこの森を出て真っ直ぐ西に行つた所にある……が、ここは南の平野を迂回して遠回りしながら向かう」

身支度を済ますと、リグレットがこれからのお予定は簡単に話した。

「みゅ？ 真っ直ぐ向かわないですか？」

「ああ、ちょっと調べたいことがあるものでな。なるべくたくさん の町へ寄つて情報を集めたい」

「わかりましたの～ わたくし出発ですの～」

話がまとまった所でミコウが先導して歩き始める……が、リグレットが冷静に待つたを掛けた。

「チーグル、森を抜ける道知つているのか？」

リグレットのその質問に、ミコウは極めて明るく口ひつ答えた。

「知つてないわけないですの～」

「笑顔で言つな！ 森は、ここから西に進めば抜けることが出来る」

「みゅみゅ～うつー 四一 分かったのですの～」

と、言いながら方向を変え、再び歩み出す//コウ。

……・が、リグレットが再び待つたを掛ける。

「そつちは北だ！ 言つて居る傍から間違えるな！」

「みゅみゅーうつー てことは西ではないのですのー」

「そつちは南つー」

「みゅー、驚事實ですのー。北の反対は西ではなかつたのですのー」

驚愕を示しながらも//コウは再び別の方向へと歩み始める。

当然リグレットは待つたを掛けた。

「だからそつちは北だと言つて居るだろつがー、お前わざと間違えてないかー？」

「みゅううう…………」のせに西が見当たらぬのですのー

「お前が異常に方向音痴なだけだ！ もういい、お前は私が想いで行く、もう勝手に歩くな」

リグレットは一人オロオロして居る//コウをひょいと拾い上げると、そのまま頭に乗せ、真っ直ぐ西へ向かつて歩み始めた。
すると//コウは泣きやうな顔をしながら申し訳なさやうにいつ告つた。

「リグレットさん……」

「もういい、別にさつきのことは怒つていたわけでは

「……後ろ髪がチクチク刺さつて痛いですの」

「そのくらい我慢しゆつー」

「みゅううつ」

リグレットに叱咤を受け、//コウは彼女の後ろ髪のチクチク攻撃

に耐えながら大人しく悶えるのであった。

「ヒュードコグレットさん、そのモーグリて所に何があるのですの~？」

ようやくチクチク感覚に慣れてきたミュウは、今更ながらその質問を繰り出した。

「ああ、そこに我らが拠点にしている神殿がある。そして何か分かつたらそこでラルゴと合流することになつてい~る」
「誰ですか? その人」

あまりにも酷いミュウのボケに、リグレットは思いつきり足を捻り口けそうになつた。

ミュウが彼女の頭から落下しそうになるが、リグレットが慌てて空中キャッチをする。

「私と同じ幹部六神将だった黒獅子ラルゴだ。巨漢で大鎌を持った……」

鎮痛な表情のリグレットの説明に、ミュウは手をポンッと叩いた。ようやく思い出したみたいである。

「思い出したのです~ あの大きくて地味な人ですの~」「(どうこう覚え方を……)」

じゅうじゅうに取つて黒獅子のラルゴの存在は、ただの『大きくて地味な人』としてしか認識されていなかつたようだ。

「みゅみゅっ！ 森の出口が見えてきたのです～」

リコウの言つ通り、前方には生茂る草木の終点となる地平線が見え始めた。

しかし、リグレットの瞳には、その異常な視力の良さから、地平線の先にあるものまで映し出されていた。

「ひつ、敵はあくまでも私達をこの森から出したくないらしい……」

リグレットが見たその先には、數十匹のレプリカナイト達が森を囲むように周りを徘徊する姿が在つた。

第6話 グラン・ソウル（後書き）

「スキット」【お前の名前は？】

リグレット「そういえばチーグル。お前の名前何と云つのだ？」

『コウ』『コウですの～』

リグレット「……そのまんまね」

『コウ』「みゅー…？ でもでも」主人様が着けてくれた名前もひやんとありますの～！」

リグレット「いや、別に聞きたくもない。これからは『コウ』と呼ばせてもらひことにする」

『コウ』「みゅうう～ ひどいですの～。おひ一つの名前はひとつもとっても格好良いですの～」

リグレット「（はあ～……）分かつた、念の為に聞いておひづ。あのレプリカが着けた名前は何だ？」

『コウ』『ブタザル』ですの～

リグレット「…………やつ Martinez と呼ばれてもいいとするわ」

第7話 魔弾炸裂（前書き）

今回は初の戦闘回です。

第1話でミコウとスケルトンが戦っていたけど、あれはまるで戦闘になつていなかつたのでw

第7話 魔弾炸裂

アザゼルは笑っていた。

不敵に……鋭く

勝ち誇ったように……黒く

「くつくつくつ。あのサルと女、このままこの俺がたやすく逃がすとでも思つなよ」

一人、アザゼルは樹海の深部で大岩に腰を掛け 笑う。

「今頃は出口付近で予め呼び寄せていたレプリカナイトの大群を見て動搖しているだろうな……くつくつくつ……」

周りに誰も居ない森の深部で、男は不敵に独り言を漏らしながら笑っていた。

その光景は余りにも不気味な為、周りにいた獣達も引いてしまつて いる。

「そして奴らの姿を見つけ次第、ナイト達の報告を受け、俺がフレスベルグに乗り、その場に直行する……くつくつくつ……抜かりのない完璧な作戦だな」

「俺がフレスベルグと無事合流できていたら……の話だがな

アザゼルの顔には満遍なく疲労の色で塗りつぶされていた。

リグレットの奇襲を受けた後、彼は自分の足跡を頼りに湖を目指したのだが、なぜか湖には辿り付けず、そしてどんどん樹海の迷宮へとハマって行つた。

アザゼルの方向音痴ぶりは、まさに//コカと負けず劣らずといった感じだった。

「俺……これからどうしよう……」

誰も居ない樹海の深部……そこには一人で途方にくれる馬鹿な男の姿が悲しく映し出されていた。

そして、フレスベルグは今日も湖で主人の帰りを待つ。

「みゅううう。リグレットさん、びつするですか〜？」

//コウ達はナイトに見つからないように近くの叢に身を隠しながら静かに様子を伺つていた。

徘徊しているナイトの数は半端ではない。この様子だと隙を見て脱出を図ることも不可能だわ。

「恐ろしく、奴らが私達を足止めしている間に、あの黒い装備の男が空からこの場へ直行してくれる……たぶんそういう戦法ね」

さすがに鋭いリグレット。完全にアザゼルの仕組んだ戦法を読みきっていた。

しかし、さすがの彼女もアザゼルがフレスベルグと合流出来ていないことまでは想定していなかつたみたいである。

そこまで想定できたらエスパーだが……

「レプリカナイト達に加えて、あの黒い装備の男まで合流されたらもうこちらに打開策はない」

「みゅみゅうっ！？ ジヤあどしそうもないですのー！？」

「いや、『合流されたら』の話よ。レプリカナイト達だけなら……もしくは黒い装備の男一人だけならまだ対処できる見込みはある」「みゅ？ どういうことですのー？」

リグレットの言葉の真意が理解できないミコウ。

いや、そもそも考えることは全てリグレットに任せていた為、自分で考えようとするしていなかつた。

「つまり、ここは正面突破で切りぬけ、出来るだけ遠くへ逃げる。空からの追跡には追い付かれるだろうが、ナイト達さえ撒ければ最悪でも奴との一対一の状況くらいは作れるだろ？」

かなりの大胆な策にミコウは呆気に取られる。

しかしあの博識なリグレットが考えたことであるのだから、もう他に良策はないのだろ？。

「この場合はスピードの勝負よ。如何に早くここを切りぬけられるか……ぐずぐずしていると遠くへ逃げる前に奴と合流されてしまうからな」

リグレットはミコウを再び頭へ乗せ、スチャツと音を立てながら両手に譜業銃を構えた。

「ミコウー、しつかり掴まつていいのよつ！　お前が振り落とされたら元も子もないのだからなつ！」
「みゅみゅーうつ！　了解ですのつ！　絶対に振り落とされないですの～」

ギュウッとリグレットの頭にしがみ付くミコウ。

リグレットの氣迫にかられると、彼の目も真剣そのものだつた。

「よしわー、いくわーーー！」

その声を合図に、リグレットは叢から飛び出し、森の出口へ向けて一田散に走り出した。

「クラスターイードーー！」

広範囲の地属性譜術が突然レプリカナイトの群がつている地点の足元に炸裂した。

「　　……つー？　　」

慌ててナイト達はその譜術が放たれた根先の方へと振り返る。

そこには物凄いスピードでナイト達の包囲網へと突っ込んでくるリグレットとミュウの姿があつた。

ナイト達は標的を発見すると、即座に続々とその場に集結していく。

その数はざつと五十は超えていた。

しかし、リグレットはそんなことお構いなしに突っ込んだ。

バンバンバンバンバン！

田にも止まらぬ早撃ちで正確にナイト達の急所を打ち貫く。銃の威力が凄いのか、彼女の腕が凄いのか……攻撃を受けたナイトは一撃で地に伏せてゆく。

そして彼女の次なる譜術が唱えられた。

「エクレールラルム！」

ナイト達が集結してきた所を見計らつて、十字の金光から光属性の光熱を放つ譜術を炸裂させた。

範囲もそこそこ広く、威力もあるので非常に使いやすい譜術。

これにはさすがに敏速のナイト達でも避け切れず、次々に光熱に溶かされていった。

威力があり正確に狙いを定めて敵を打ち貫く射撃と、隙の無く状況に適した判断で放たれる譜術、この二つをかね揃えたリグレットに、ナイト達は彼女に攻撃を与えるどころか、触れることすら出来ずについた。

「みゅみゅ～うつ！　さすがリグレットさんですの～　爽快ですの～」

そしてミコウは、パワーアップしたリングの力を借りて一緒に戦う……と思いきや、ただリグレットの頭の上で何とも言えない爽快感を味わうのに夢中になつていていただけだった。

リグレットはそのまま森の出口を掛け抜けた。ナイト達は彼女のスピードに着いて来れない。

近接攻撃しか出来ないナイト達にとって、相手にスピードで負けてしまうと何もやりようがないのだ。

このままなら無傷で森を脱出できる… そう思った矢先

「……っ！？」

前方にはすでに譜術を唱え終えたレプリカルーンの大群が待ち構えていた。

レプリカルーン　レプリカナイトよりも体力、耐久力では劣るが、譜術攻撃力は半端なく強い。
まさに超一流譜術者と変わりない戦闘力を持つといつても過言ではなく、ある意味ナイトよりも厄介な相手。
ただし、その譜術詠唱中には大きく隙が生じるため、譜術が放たれる前に倒せばそんなに苦戦しない相手でもある。

……だが、目の前のルーン達はすでに詠唱が唱え終えられていた。

「 「 「 イラプショントークン！」」

レプリカルーン達の言葉が重なり、そして一斉に放たれる炎の譜術。

「くつ……

渦状の火炎譜術が真っ直ぐリグレットを目指して飛んでくる。

バンバンバンバン！

リグレットはその火の渦に向けてひたすら早撃ちを繰り返す。すると放たれた弾とぶつかった火の渦は、互いの威力に相殺され、次々に効力を失う。

相殺しきれなかつた火の渦は何とか眼前で交わし、丸焼けにならずに済んだ。

想定外の相手を前にしても冷静な判断を失わず、リグレットはその攻撃全てを華麗に対処する。

後ろからはナイト達が追つてきている為、立ち止まる」とは出来ない。

リグレットはそのままレプリカルーンが群がっている前方だけを向いて、スピードを落とすことなく突っ込んだ。

ルーン達は譜術の再詠唱に入るが、それが唱え終えられる前にリグレット譜術が先に完成した。

「クラスターイード！」

最初に放つた譜術と同じものをルーン達の足元に炸裂させる。

先ほどは奇襲用に放つたのだが、今度は攻撃用に討つ。

耐久力の低いルーンには威力の弱いこの術でも効果は抜群だつた。

地属性譜術の激流に、ある者は詠唱を止められ、ある者はそのまま地に伏せてしまつ。

耐久力がないにも程が感じられる体たらくだつた。

しかし、如何にこの術が範囲広しと言えど、すべてのルーン達を撒き込めたわけではない。

攻撃に撒き込まれなかつたルーン達は、そのまま詠唱を唱え続けていた。

リグレットは再び銃を構え、また譜術を相殺する姿勢を見せたまま走る。

ぐいっ！

「……っ！？」

しかし、地に伏せていたレプリカルーンの一匹が不意にリグレットの足を掴み、彼女の体制を崩させた。

「　「　「イラプショーンっ！」」

その瞬間、ルーン達の譜術攻撃の第一派が一斉に放たれた。

第7話 魔弾炸裂（後書き）

「スキット」【応援?】

リグレット「はあっ！ ハクレールラルムー！」
///コウ「（もぐもぐ）……みゅみゅ～う！ リグレットさん、さす
がですか～」

リグレット「食ひた！ ホーフー・ランスツー！」

///コウ「（もぐもぐもぐ）……強じですか～」 リグレットさん
最強ですか～」

リグレット「そこだ！ クラスターレイドー！」

///コウ「（もぐもぐもぐもぐ）……でもティアさんと技が被りすぎ
てこむのが……（もぐもぐ）……少し残念ですか～」

リグレット「…………」

///コウ「みゅ？ 向ですか？」

リグレット「何を……しているんだ？」

///コウ「向ひて……（もぐもぐ）……応援ですか～」

リグレット「菓子を口に呑んだままか？」

「ノウ「みゆつ! ? バレたですのー?」

リグレット「眞面目にやれえええええええええええええつー！」

第8話 たった一発の攻撃で（前書き）

土日は日中更新ができます。平日は夕方・夜限定ですけれど。

第8話 たつた一発の攻撃で

「くっ……！」

慌てて体制を立て直そうとするリグレットだが、すぐ目の前には無数の火の渦が迫っていた。

バンバンバンバンバンバン！

先と同じように譜業銃の早撃ちにより数個の火の渦は相殺した。だが、いくら彼女が銃の名手でも、軽く二十を超える火の渦全てを相殺することは不可能だつた。

「ちつ！」

足を掴まれているため、回避も不可能と悟つたリグレットは慌てて防御の体制に入る。

「リグレットさん！ 危ないですのー！」

リグレットの危機を察したミュウは彼女を庇つついに前に飛び降りた。

同時にソーサラーリングが赤く変色する。それに同調してミュウの身体も赤くなつた。

そう、これはリングの力を解き放つときに起じる前兆、今まで半分遊び気分だったミュウも、リグレットの危機を面してようやく本気になつたのだ。

「ふあいあ~~~~~！」

！」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！

直径数メートルの豪火炎がミュウの口から放たれた。

大きさも、規模も、威力も、全てがルーン達の譜術よりも超越された炎。

その圧倒的な炎は、リグレットが襲われかけていた火の渦を全て飲み込み、物凄いスピードを保つままルーン達のいる方向へと走った。

鈍足のルーン達には避ける術などあるはずもなく、あつという間に大火炎の中に撒き込まれ、墨になつた。

「　　」…………「　　」

突然の出来事に唖然とするナイト達とルーン達、そしてリグレット。

「みゅみゅ～う！　リグレットさん、今がチャンスですの～」

ミコウの言葉にハツと意識を戻したリグレットは、自分の足を掴んでいたルーンの手を思いつきり踏んづけ解放されると、ミュウを頭に乗せ、再び走り出した。

しかしナイト達とルーン達はミュウの放った炎に恐れて足を動かせずにいた。それほどミコウの一撃は強大で恐ろしかつたことを意味している。わずか一発で敵全体の戦意を喪失させるほど……

ナイト達はどんどん離れてゆくミュウとリグレットの姿を傍目にしながらも、恐れを成して一人を追い掛けようとするものはいなか

つた。

森を脱出してから数十分、リグレットはようやく走りを止め、一息吐いた。

それでも疲れた様子は見せていない。相変わらずとんでもない体力の持ち主だ。

「……」これまでくればナイト達の追跡の心配もないだろう

「みゅう！　さすがリグレットさんですの～、レプリカナイト達の姿がもう全然見えないですの～」

「（……すごいのは私ではなく、お前だ）」

ミコウは気付いていなかつたが、彼の放つた炎が威嚇効果を放つていた。

たつた一発の攻撃で完全にナイト達の追跡意欲を失せさせていたのだ。

よつて今回の立役者はリグレットではなくミコウであった。

「（ヴァーゲストがリングを欲しがる理由が少し分かつた気がする……）」

あの炎の威力は六神将のリグレットですら驚愕するものだった。それほどリングに絶大なパワーが秘めていることがはつきりした。

「みゅう、それにしても黒い人はどうしたのですの～？　追っかけ

てこないですの～

〃コウは澄み渡つた青い空をキョロキョロと見渡しながら囁く。

「ああ。だが奴がこのまま我らを易々と逃がしてくれるとは思えない。いつでも万全の体力で戦えるようここからは警戒しながら歩いて行こう」

リグレットならもう一時間くらい走つたところで万全な体力をキープ出来そうな気もするが、念には念を込めて……と言つことだろう。

ミコウ達はそれからずっと周りを警戒しつつ、南に位置する街を目指すのだった。

一方、その話題になつてゐる人物はと言つて……

「やういえば、どうやつてナイト達から報告を受けたのつもつだったんだ？ 僕

樹海の更に深部へと歩み続けているアザゼルは、ふとそんな疑問を口に出していた。

アザゼルからナイト達へは念話で通ずることは可能だが、ナイト達からアザゼルへは……

「ダメダメだな……僕

一人、卑下し落ち込むアザゼル。
彼がダメダメだつてことくらい、今更言われなくとも皆分かって
いることだった。

ぐう

フレスベルグは今も湖にてお腹を空かせながら主人の帰りを待ち
続いている。

リグレットとミコウは澄み切つた満天の青い空をじーっと見つめ、
呆然としながらそれぞれ呟いた。

「……追いかけてこなかつたな」
「……追いかけてこなかつたですの」

ずっと警戒しながら歩くこと小一時間、特に異変が起らぬまま
街の見える景色の場所にまでやつてきた一人。
拍子抜けとはまさにこのことである。

「必ず追いかけてくると踏んでいたのだが、何を考えているのだか
……あの男の真意が読めないわ」

アザゼルのボケ行動がリグレットの心中に大きな混乱を招いてい
た。

真意が読めないのも当然である。

彼自身予測できなかつた事態が、進行形で本人を襲つてゐるのだから……

「首が痛いですの～」

ミコウが首を「キコキ鳴らし辛そつた顔をすると、そのままリグレットの頭の上で倒れ伏せた。

小一時間ずっと空ばかりを見上げていたので首筋に痛みが生じるのも無理はない。

肩が凝つたのはリグレットもまた同じだった。

「とりあえず街へ入つて先に宿を取ろう」

リグレットの提案にミコウも無言で頷くと、二人はゆっくりとした赴きで街の方へと向かつた。

第8話 たった一発の攻撃で（後書き）

見て貰てありがとうございます！

それとお気に入り登録、評価を付けてくれた人ありがとうございます！

こんなにもPVが増えるとは思わなかつたので、とても感動しております。

これからもモチベーションを保つて、更新頑張れそうです。

第9話 わつかなこねりやさの像（前書き）

お毎に更新する予定でしたが、少し用ができてしまい、こつもの時間の更新になってしましました。
そしてサブタイトルがだんだん適当になってしまった気が……（汗）

第9話 おつかないおつかわんの像

自由の街『リーム』。

この街の特徴は表と裏がハッキリと分かれている所だろう。

街門がある南側の道が表通り、その反対の路地が裏通り。

表通りは農園や雑貨店など仕事に真面目な人間が集まり治安も非常に良い。今も子供達が元気に走り回っている。

しかし、問題なのは裏通り、ぎつしりと敷き詰められたように並ぶ建物は、酒場や博打施設など事業店が大半を占めている。店間の競争が特徴的だが、お世辞にも治安が良いとは言い難い。治安が悪くなれば店間の嫌がらせが始まったり、柄の悪い客が店の中で暴れたりと人生に暴落した人間が群がっていることが多い。

ミュウ達は今、表通りを歩んでいる。

しかし、なぜか彼らに街の住人達の視線が集中していた。

「みゅみゅ？ なんか見られている気がするですの～」

視線に気づいたミュウが辺りをキョロキョロしながら不思議そうに顔をしかめた。

対するリグレットはそんな視線など気にせず、平然とした表情を崩さぬのまま真っ直ぐ前だけを見続けている。

「ああ、なぜか私が人通りの多い街を歩くといつも視線が集中するのだ。まあ軍服を着たまま街の中へ入つたりしたらこの反応も当然だろ？」「

「みゅみゅ～う、なるほどですの～」

リグレットの言葉に納得する//コウ。

では、ここで少し街の人達の心の中を覗いてみよう。

「（か、可憐だ……）」

「（あんな美人……今まで見たことがない）」

「（声かけちゃおつかなあ。ああ、でも遠くで見ているだけで幸せかも）」

視線の真意はそんな所だった。

妙に肌を露出している軍服に見えない軍服、長身でハイソックスにミニスカを履いた金髪美女。

こんな女性が堂々と街の中など歩いていたら視線が集まるのは当然の成り行きだった。

そんな自覚など微塵に感じていないリグレットは、これからも街の中を歩く度に視線を集め続けることだらう。

宿の予約を取り、しばらく自由行動とすることになつたが、//コウは別段することがあるわけでもなく、そのままリグレットの頭の上に居続けていた。

チクチク感覚にも完全に慣れた//コウは、ここがお気に入りの場所になつた様子である。

しばらくリグレットの頭の上で「ゴロ、ゴロ」とこなした//コウが、ふと前方にみたことのある造物を発見した。

「みゅみゅ？あの怖い顔の石造、見たことあるですか～」

田の前に飛び込んできた光景は、ミコウが前に立ち寄った街と同じように噴水の中央に堂々と聳え立つ怖い顔のおっさんの石造だった。

威厳のある容姿に一メートルを越す巨体、良い言い方をすると赴きのある風体とも思えるが、ミコウにしてみたら、やつぱりただの怖い顔のおっさんだった。

するとリグレットは石造を威嚇するように睨むと、この石造の人物の正体について語り始めた。

「……この男はヴァーゲストといつ名の男だ」

「みゅ？ ヴァーツラ」

「違う！ その間違い方だけはするなー」

「つかり別タイトルの敵キャラの名を言つたくなつたミコウの口を慌てて塞ぐリグレット。

「ホンッと咳払いを一つ入れて氣を取り直すと、リグレットは再び語りを続けた。

「簡単に言つとこの世界の支配者よ。お前を襲つていた黒い装備の男も奴の仲間だ」

「みゅ？ つまり王様つてことですか？」

「……違うな。王と支配者では全然意味合いが違う。奴はこの世界の均衡を崩そうとしている。言わば革命者だ」

リグレットの表情が更に曇つて行く。どうやらリグレットはヴァーゲストという男に対して嫌悪を抱かなければならない事情があるようだ。

実は彼女、この街へ寄つた目的はこの石造の人物、ヴァーゲストの動向を探る手がかりを集めることだった。

「…………みゅ？」

一方で全く理解出来ていなかつたミュウ。

彼にしてみたら少しでも難しい言葉が出てきた地点で、アウトらしい。

「もういい、詳しい」とは『モーヴ』に着いてから話すとしよう。
今は情報收拾が先だ。裏通りへ行くわよ

石造であろうと、ヴァーゲストの顔は見たくないのか、リグレットは早足でその場を去つて行く。

表通りに聳える一つの石像。

しかし、のどかな街並みの風景には余りにも場違いな雰囲気を放つていた石像だった。

表通りを抜けると、明るかつた雰囲気が一転し、曇だというのに異様な暗さを放つ暗黒街が姿を現す。それがリームの裏通りだ。道端で寝ているもの、酒を飲んでいるもの、喧嘩を始めて殴り合っているもの……世の中の墮落者が集結した光景としては当然のものかもしれないが、やはり見ていて気持ち良いものではない。

ミュウはリグレットの頭の上で丸くなつて怯えているが、対する

彼女はそんな風景に気を止めようともせず堂々と歩んでいた。

そしてここでもリグレットは大衆の注目の的となっていた。表通りと同じように遠くて眺めている人がほとんどだが、中には声を掛けてくるものもいた。

「よ～、ネーちゃん……ヒック……ものすつごい美人だな～……ヒック……俺と一緒に酒場で杯をかわさねえか？」

明らかに『僕、酔っ払ってます』と言わんばかりの男が声を掛けてくる。

しかもまだ飲み足りないのか、リグレットを酒場に誘ってきた。ある意味強者かもしれない。

リグレットはもううんそな誘いなど軽くあしらいつ……と思いつきや、彼女から出た言葉は意外なものだった。

「酒場、か。いいだろ？、案内しin」

リグレットは意外にも肯定を示した。

これにはミユウも声を掛けてきた男ですらも驚愕していた。

「ふつ。女はそうになくっちゃな。ネーちゃん、こっちだ」

男は嫌らしく笑みを浮かべると、手を招いて彼女を誘導しながら先導した。

ミユウはリグレットの肩にピコンと飛び移ると、そのまま彼女に耳打ちをした。

「（リグレットさん、いいですか？　ああいう男の人人が好みですか？」

?) 」

「（そんなわけないだろ？……酒場は情報の溜まり場でもあるからな。それに何故かこいつら輩は重要な情報を隠し持つて居る」とが多）」

「（みゅうう。でもなんだか危なそうな雰囲気ですの～）」

「（まあ、これほど下落した暗黒街だ。少しくらい発砲騒ぎになつた所で特に問題はないだろ？）」

「（みゅみゅつ～？）」

さすがに発砲騒ぎは不味い氣がするのだが、リグレットの目は本気だ。

つまりそういう事態も有り得ると想ひことだらう。

「ネーちゃん……ヒック……ついたぞ～。ソレが酒場だ」

「そうか、ご苦労だつた」

ガンッ！

「はう……つ～」

酒場に着いた途端、この男にはもう用済みと言わんばかりに、彼の後頭部を譜業銃の柄でぶん殴るリグレット。

当たり所が悪かったのか、それとも彼女が狙つてやつたことなんか、男はその一撃で気絶し頭を回しながら地に伏せた。

「よし、行くぞ」

「（……着いてくるんじゃなかつたですの～）」

リグレットの大膽行動を田の辺たりにしたヨウは、早くも後悔の念に漫るのであつた。

第9話 わつかなこねりやさの像（後書き）

見てくれてありがとうございます！

そろそろ9話分全部見直してみて、誤字脱字を修正してこうかと思ひます。

サブタイ横に（改）がたくさんついていても内容は変わっていませんのでご安心を

第10話 桃色の髪と黒い導師服（前書き）

実はいつと僕、TOAのサブクエを結構見逃しながら一回クリアしただけなんですね。

なので物語に変な矛盾が出てきてしまつかもしませんがご了承を。まあ、異世界を出している時点で矛盾もなにもないんですけどねw

第10話 桃色の髪と黒い導師服

店内はある意味予想通りの墮落っぷりだった。

酔った男が酒瓶を片手に暴れていたり、周りの客に絡んで喧嘩になっていたりとまさに酒乱の地獄絵図。

現在も「ゴロツキ達によるパイ生地を用いたドッヂボールが開催されている。

ミコウ達はそんな最中に酒場のドアを潜つた。

リグレットはドアを潜ると、何の前ぶれもなくいきなり譜業銃を構えた。

「おー、『ゴロツキ共。ケガをしたくなかったらヴァーゲストの動向について知っていることを全て話せ』

「（いきなり脅しですの？！？）」

彼女が先ほど言った通り、いきなり発砲騒ぎの前兆を……しかも自分から見せるリグレット。

ある意味ゴロツキよりも性質が悪いかも知れない。

しかし、大半のゴロツキは彼女の脅しに全く動じていない様子だった。

「はっ！ そんな風に銃を向けられることなど、いつちは日常茶飯事でな。そんなんじゃ全くビビんねえんだ……よつー」

セリフを終えるのと同時に、リグレットに向けてパイ生地を投げるゴロツキ。

それが基点となつて、周囲にいたゴロツキ達も次々に生地を投げてきた。

リグレットは余裕でその全ての投擲を交わす。軽やかなステップで、右へ、左へ、下へ……

「おぶつー！」

だが、リグレットが下へ避けた瞬間、彼女の頭の上に居たミコウの顔面に見事パイ生地が命中した。

「すまない。お前が居たの忘れていたわ」

「忘れてた……じゃないですの～！ リグレットさん酷いですの～」

顔を生地塗れにしながら涙目で訴えるミコウ。

「分かつた分かつた。とりあえずこれで顔をふけ」

そう言ひ、どこからか取り出したハンカチを手渡し、ミコウを気遣うリグレット。

「みゅうう。ありがとうございます～」

リグレットの厚意を素直に受けとむミコウ。

やはり彼女、ミコウの前ではたまに優しい一面を見せる。

「それと、顔を拭くときは頭から降りてくれ。私の髪にパイクすが付く」

「みゅみゅつー？」

そう言ひ、ミコウが自ら降りる前にリグレットは彼の耳を引っ

つかみ、少々乱暴に地面へ投げ捨てた。

優しいリグレットはほんの一瞬にして、閃光のように消え失せて

いたのだった。

ミコウが床に降りて顔を拭いている最中にも、ハロロシキ達の怒涛のパイ投げ攻撃は続いていた。

当然、一発も当たる気配はないのだが、いつまでも鳴り止まないその攻撃にリグレットは痺れを切らし始める。

「仕方ない。脅しではなく、本気だといふことを少し示してやるつ

そう言い放つと、リグレットは床に飛び回るパイを一眼し、両手に構えた銃の引き金に指を掛けた。

バンバンバンバンバンッ！！

相変わらず見事な早撃ちが店内に炸裂する。

そして、弾道は全て空中に投げ放たれていたパイに命中し、生地は粉と化して床に散らばった。

「　　」
「　　」
「　　」
「　　」
「　　」
「　　」

信じられない神業を田の当たりにしたゴロシキ達は、口を開けたまま田を見開いて固まつた。

室内に充満する沈黙、その均衡を解いたのはミコウだった。

「おぶひゅあっ！」

黙する室内の中、ミコウの悲鳴に近い声が響いた。

見ると、リグレットが粉にしたパイ生地を今度は頭から被つてゐる彼の姿があつた。

頭上に飛び交うパイが粉になれば、当然床に座っていたミコウはその粉くずを頭から被ることになる。

ミコウにしてみれば突然大量の粉が頭から振つてきたようなものだ。

「……リグレットさん」

今度は粉まみれになりながら、再び哀みの目でリグレットを見つめるミコウ。

その表情からは少々怒氣も放たれていた。

「さあ、この床に散らばるパイみたいになりたくなかつたら、知っている情報を全て話すのだな」

「（無視ですの！？）」

極自然にミコウの存在をスルーして、話を先へ進めるリグレット。よく見ると、彼女の頬に一筋の汗が流れていた。

彼女なりに『やつてしまつた』と思う所はあるらしい。

しかし、チーグル相手に頭を下げるのはプライドが許さないのか、リグレットはなるべくミコウの姿を視界にいれないようにしている。俗に言つ『気付かないフリ』である。

「か、格好良い……」

突然、ゴロツキの一人がポツリと言葉を漏らした。

それに連なつて、他のゴロツキ達も次々に心中を言葉に漏らし始

めた。

「美しい……」

「（ぼーつ……）」

リグレットの銃技とその美しい容姿に見惚れ、次々と頬を朱に染めてゆく男共。

そして、ここから怒涛のアピールタイムが始まる。

「姐さん！　俺の持つている情報、全て教えます！」

「いやいや、姐さん！　俺の方が良い情報を持つてまつせ！」

「バカ言え！　姐さんに情報を与えるのは俺に決まっているだろ！」

リグレットのことを『姐さん』と称して、彼女に詰寄つてくる男共。

このコントみたいな状況に当のリグレットはただ困惑とするしかなかった。

「なるほど。街の中にまでヴァーゲストの手駒が徘徊しているのか」
リグレットの睨んだ通り、ゴロツキ達はたくさんの貴重情報を隠し持つていた。

彼女は奥にあるテーブルに腰を掛け、一人一人ゴロツキ達の情報を丁寧に聞き入っていた。今の男でもう四人目だ。

話を終えると次の男が新たな情報を語る。一人一人の話が長いの

で、彼女の席の後ろには『姉さん待ち』と称される情報屋達の列が連なっていた。

もはやリグレットの魅力に酒場中の男を虜になっている……と、思いきや、一人だけカウンターの奥でつまらなそうにしている男がいた。

「（けつ、何が姉さんだよ。俺の店は客の気性の荒さが売りだつてのに）」

そう、この酒場のマスターだ。彼はつまらなさうに舌打ちをしながらリグレットを睨み続けている。

「（オマケに俺の店をメチャクチャにしやがつて……あー。くそ！ムシャクシャするー！）」

店がメチャクチャだったのは彼女が店に入る前からだったはずだが、マスターは何か彼女に因縁を付けないと気が済まなくなつていた。

そんなマスターの視界にふとある珍物の姿が目に入った。

「（ふつ、こいつは使えるかもしけねえなあ）」

マスターが嫌らしく浮かべる笑みの先には、勝手に店の料理を食べ始めているミコウの姿があった。

一方リグレットの方はようやく一段落つけそうなくらい情報屋の人数を消化していた。

数十人から得た情報を彼女は一言一句逃さず記憶していた。

これにはさすがのリグレットにも疲労の色が見え始めている。

そしてついに『姐さん待ち』の列は無くなり、最後の情報屋が彼女と対向して席についた。

「俺の情報なんですが……いや、情報とは言いがたいかも知れませんが、昨日、妙な女が俺の店に訪ねてきたんですよ」

どうやらこの男は情報屋ではなく、どこかの店主らしい。

「どんな女だ?」

リグレットが聞き返すと、彼はゆっくりと真実の回想を語り始めた。

「女……というより、子供だな。年は十そこそこくらいの……そのガキが俺にこう訪ねてきたんすよ。『ソーサラーリングといつ響律付を見たことはないか?』ってね」

「(やはり、ヴァーゲストは部下を総導出させてロシングを探しているのか)」

ある意味リグレットの予想通りの情報。

しかしこの後、男は思いも寄らぬ情報を語り始めた。

「相手はガキだから適当にあしらおうと思つたんすけど……そのガキ、後にライガとフレスベルグなんて連れてやがった。もう俺は腰が引けちまつたよ」

その言葉を聞いた瞬間、リグレットは思いつきり表情を強張らせた。

そして迫るように男に詰寄ると、緊迫した表情のまま「う聞き返す。

「……っ！？　おい！　その女の特徴は！？　外見はっ！？」

「と、特徴つすか？　長い桃色の髪に……黒い導師服を着ていたな。妙に根暗なガキでヘンテコなヌイグルミみたいなものを抱いていました」

「…………」

微妙に曖昧な特徴表現だが、リグレットに取っては確信的な言葉だった。

「（まさか……まさか……でもなぜだ？　なぜアイツがリングを探る必要があるのだ？　……ま、まさか……）」

リグレットの表情は動搖からか曇っていた。確証があるわけではない、だが男が言った特徴の全てに彼女の知り合いの姿が当てはまつていた。

「（詳しく調べる必要があるな）。情報提供感謝する！……ミユウ、行くわよ！」

ガタンと音を立て、席を立つと、リグレットは他のテーブルの上で料理を食べていたミユウに声を掛けた。

「みゅみゅ～う、分かりま」

「そろは行かねえなあつ！」

ミコウがリグレットの傍へ駆け寄ろうとしたその時、店のマスターがミコウの身体を引っ掴み、そして彼の頭に包丁を突きつけてきた。

第10話 桃色の髪と黒い導師服（後書き）

見てくれてありがとうございます！

実は投稿するうえで一番悩ましいのはサブタイトルなんですよね。
今回みたいに本文ネタバレを含んだタイトルは自重した方がいいのかなあ？ ふ～む……

第1-1話 アツはナツいですの（前書き）

試しに書き方を少し変えてみました。
行間を開けた今回の書き方と前回までの書き方、どちらが良かつた
か、感想で送つてもらえると幸いです。

第1-1話 アツはナツいです

「みゅつー？ みゅみゅみゅーうつー？」

突然の出来事にミコウの気は完全に動転していた。無意味に足をジタバタさせるが無駄な抵抗だった。

そんなミコウとは対称的にリグレットは冷静に言葉を連ねる。

「ソイツは私の連れだ。離してやつてくれないか？」

軽く相手を睨み、威嚇するように怒氣を放ちながら言葉をぶつけるリグレット。

しかし、店主は鼻で笑い、小馬鹿にしたような態度で反抗してきた。

「はつ！ そんな簡単に離すつもりがあつたら最初から捕まえちゃいねえよ」

もつともな意見で反論する店主。

話し合いは無駄だと悟ったリグレットは腰から譜業銃を取り出そうとする。

「おつとつ！ 銃を構えた瞬間、こいつの頭は血祭りになるぜ。まあ、どうじてしきうするつもりだがな」

店主の包丁を持つ手に力が入る。恐らく彼の決意は本物だらう。

「…………」

リグレットは考え込むように表情を固める。//コウのピンチだと
いつに全く動搖を見せていらない様子だった。

するとリグレットは突然//コウ達に背を向け、酒場の入り口前まで歩き出した。

「おーっ！　こいつがどうなってもいーつてーのかー？」

「の反応には、逆に店主の方が動搖を示していた。彼にしてみればリグレットの動搖する姿を見たいが為に取った行動なだけに、いつまでも冷静で居られると虚しさだけが胸に募る。

「//コウ、そのまま上を向け」

「みゅ？」

突然のリグレットが出した命令に、素直に従い、上を向く//コウ。

「そのまま火を拭け」

「みゅみゅ～う、わかりましたですの～」

//コウは笑顔で了承をすると、瞬時にソーサラーリングの第五音素の譜が全体を赤く変色させた。

だが、店主はそんなリングの変化になど気付かず、余裕に笑いころげていた。

「はつはつはつ！
こんな小動物が吐く炎なんて怖くも

ミコウの口から放たれた圧倒的な規模の炎が、店主の顔をかすめ、店の屋根全てを燃やし尽くした。

そしてこの圧倒的な炎を見た者は共通した反応を示すことをリグレットは知っていた。

.....」」」」

啞然とする一同達。

店主の手元から、ポロッと包丁が……そしてミコウが床に転げ落ちた。

「みゅううう。死ぬかと思つたのですの」

酒場の一軒の後、表通りに帰つてきた一人は宿の一室で一息ついていた。

ミコウは酒場での出来事を回想しながら愚痴るよつて言葉を漏らしていた。

しかし、リグレットは別のことを考えていた為、ミコウの愚痴など耳に入つてきていなかつた。

「（リングを探していると言つことは、アイツもヴァーゲスト側に着いているといふことか？　しかし、なぜ……？）」

「みゅ？　リグレットさん、何を怖い顔しているのですの？」

リグレットの様子がおかしいことに気付いたミコウは、心配そうに彼女の顔を覗き見る。

だが、考え方沒頭しているリグレットには目の前の迫るミコウの顔にも気付いていなかつた。

「（アイツがこの街に居たのは昨日と聞いた。つまりもつこの街に滞在している可能性は低い）」

「みゅ～う？　リグレットや～ん？」

ミコウはリグレットの肩に乗り移り、小さな手で彼女の頬をペシペシと叩く。その光景は、ペットが主人にかまつて欲しい時に見せる仕種によく似ていた。

しかしリグレットはそれでも気が付かない。

「（「」のような平野に隔離された街だと、次にアイツがどこに行つたのかは推測しがたいな）」

「みゅみゅーう。リグレットさんが突っ込みなんて明らかにオカシイですの～」

「コウは彼女の額に手を当てる。熱を測つてこむつもりなのだろう。

しかし、体温に異常は感じられない。

リグレットが終止無言なので、なぜかコウにビビりしても彼女にツッコんでもらいたいという衝動が押し寄せた。

「え～……」「ほん……いや～、リグレットさん、アツはナツいですの～」

「…………」

「コウの決死の覚悟で繰り出した定番ボケにも反応を示さないリグレット。

それでも「コウはめげなかつた。

「（みゅうう……無反応は辛いですの……でも負けないですの）。いや～、リグレットさん、サムはフコいですの～」

今度はあまり聞かないボケを繰り出す「コウ。定番ボケの冬バー

ジョンだが、説明がないとたぶんわからない。

「…………」

「みゅうううう……」

ミコウが生まれて初めてシックコリエの寂しさを実感した瞬間だった。

リグレットはこれから取るべき最良の行動を思考していた。

そして長考の末、導き出した答えは

「ミコウ、予定を変え、これからモーヴへ直行することに」

リグレットはなぜか言葉を途中で止めた……といつよつ止まった。妙な珍物が視界に入ってきたからである。

「ミコウ……何をやっているのだ?」

見ると、鼻に割り箸を突き刺し、お腹にマジックで腹顔が描かれており、どこからか仕入れてきた大きなボールの上で、器用に皿回しをしているミコウの姿が在った。

「ふが!? ふがががふががふが!」

鼻に割り箸を突き刺している為、ミコウが何を言っているのかわからない。

リグレットは無言でミコウの鼻に刺さつて、割り箸を抜いた。

「やつと、リグレットさんがツツコんでくれたですの～」

定番ボケでツツコんでもらえなかつたミコウは、一発撃で攻める口にしていた。

腹芸に始まり、回し、球乗り、ヒスカレーして行き、最終的に現在に至つた。

「.....」

ズボツ！

「ふがつー。」

無言のまま、再びミコウの鼻に割り箸突っ込むリグレット。

「予定を変更し、今からモーグへ向かうとする。お前も準備だけは済ませておけ」

そう呟つと、彼女は部屋を出て行つた。道具屋に常備品でも買いつ行くのだといふ。

「…………」

一人部屋に残されたミコウは、ゆっくりと玉を降り、静かに鼻から割り箸を抜いた。

天然以外のボケは、どうもイマイチなミコウだった。

第11話 アツはナツいです（後書き）

【スキット】
【姉さんよ、永遠に】

「店が
庵の店が
丸薫ガ二

「ロッキ達」

店主「くわつーーー」のまおじや済まさねえぞ！……そうだ、あることなことと噂を広めてこの街から出入り禁止令を食らわしてやる

『ゴロツキ達『…………つ！？』

店主「よし、さっそく……って、アレ？ どうしたんだ？ お前ら俺の周りに集まつてきて……あれ？ なんか殺氣を放つてないか！？」

「俺達の姉さんに……」

コロツキB「出入り禁止令など」

「ふざけたこと抜かすんじゃねえ！」 クソオヤジが！！

.....

.....

『プロシキロ』「姐さん、悪は絶りました」

『プロシキロ』「俺達はこつでも姐さんの帰りを待つてこます」

『プロシキロ』「姐さんとの再会を信じて……一同、敬礼……」

『プロシキロ』（ペシッ）

店主「……な、なんなんだ……」

第1-2話 湖の戦い（前書き）

「スキット」 【旅準備】

リグレット 「医療関係に……ボトル関係……」

〃コウ「お菓子関係に……木の実関係……」

リグレット 「あと食材と……日用品も……」

〃コウ「あとお菓子関係と……お菓子関係も……」

リグレット 「よし、準備するものさうんな所か……」

〃コウ「いっしも準備完了ですの～」

リグレット 「……………Hクレールラルム！」

〃コウ「みゅうううー…? 〃コウの荷物が！ 必需品が壊れていた

「…」

リグレット 「よし、準備も整った所でわざと街を出るわよ

〃コウ「…………（シクシク）」

第12話 湖の戦い

「はあ……はあ……はあ……せ、やつと……森から出られた……
うつ……」

未だに樹海をさまよって続けていたアザゼルにて、よひやく祝福のゴー
ールが訪れる。

疲労が汗となり、頭の天辺から足の根元まで汗球が漫つてこる。
黒いフェイスマスクも汗で満遍なく濡れていた。

「ちつ、結局フレスベルグと合流できなかつたじやねえか。つたく、
あの鳥め……（ぶつぶつ）」

まるで合流出来なかつたのは自分のせいではなく、フレスベルグ
の方に非があるみたいな言い方をするアザゼル。

「まあ、あんな鳥頭なんぞ放つておくとして……これからどうする
か……」

森から脱出できたとはいえ、その先に待つは何も無い平野のみ
……フレスベルグ不在で上空移動ができない今、状況は森の中にい
るときと何ら変わりなかった。

「しゃーねえ……歩くしか方法は　」

「アザゼル……」

愚痴りながら歩みを進めたその時、不意に背後から何者かに声を

掛けられた。

「'つおおおうつー。」

こんな辺境に人がいるとは思わなかつたアザゼルは、思いつきり身体を仰け反らせながら驚いた。

振り返つたその先には、長いピンク髪の導師服を着た、まだ幼さが残る少女がそこに立つていた。

その背後にはライガとフレスベルグが待機している。ちなみにアザゼルが連れていったフレスベルグとは別種である。

「……何だ、新入りのガキか。何でこんな所にいるんだ？」

「リングを探していたら……アザゼルの姿が……見えたから……」

なぜか躊躇いがちに言葉を連ねる少女。

別に緊張していいるわけではなく、単にこいつ性格なのだらつ。

「そつか。でもリングはもうこの森にはねえぞ。たぶんとつぐに脱出済みだらうしな」

つまらなそうに顔を顰め、舌打ちを入れるアザゼル。

自分の間抜けが原因とはいえ、ミュウとリグレットに逃げられたことで彼の機嫌はよろしくなかつた。

「……なんだ。じゃここにはもう用はないから

そういうと、背後に控えていたフレスベルグに再び跨る少女。

だが、ここでアザゼルがストップを掛けた。

「待て、お前もフレスベルグを連れていたのか。じゃ俺も乗せて行け」

「やだ。じゃあね」

アザゼルの誠意の感じられない頼み方に即答で断る少女。そしてすぐに空の彼方へと飛び去つて行つた。

一人残つた彼に残るのは、新入りにすら見捨てられたという事実の虚しさ。

「……さて、本当にこれからどうしよう

新入りの少女にあつさり振られたアザゼルは、虚しさのあまりしばし空を見上げながらしばらく呆然と立ちぬくのだった。

バザバサバサバサバサ……

空を見上げていると、湖に待機していたはずのフレスベルグが大空を駆け巡っていた。

何時間も放置されていたフレスベルグは、主人の顔など真っ白に忘れ、彼は完全に野生へと戻つていたのであった。

永遠と広がる緑と土色の平野。そんな道無き道をひたすら歩み続けた先に見えた蒼の水流。

その場所は旅人からは『平野のオアシス』と呼ばれ、今も多くの旅人が水流の音に耳を傾けながら旅の疲れを癒している。

ミュウとリグレットもその一角で休憩を取っていた。

「綺麗な湖ですか？」

田の前に広がる絶景に、田を輝かせながら感動するミュウ。

つい最近別の湖で溺れかけたことなど、彼の脳裏にはすでにジテリート済みのことらしい。

「このオアシスは音素の気象密度が薄いのだ。だからこの場所に魔物が侵入することはほぼ皆無であり、湖が汚されないためこの透明度を保てている……といつわけよ」

湖の諸事情を丁寧に語るリグレット。

「…………」

リグレットの丁寧な質問に、永きに渡る沈黙で返すミュウ。

「……すまない」

相手が//コウだったことを悟った瞬間、自分の誤りを認め素直に謝るリグレット。

しかし、謝られる逆に虚しさが募るだけであった。

「みゅうううううう……」

落ち込みっぷりを全面に醸し出し、無口になれる//コウ。

そんな彼の心情を察してか、リグレットが別の話題を振り、場の空気を取り戻す。

「そういうえば//コウ。お前、火を噴くこと以外にどんな能力があるのだ？ リングには三つの譜が刻まれているようだが、……」

彼女は//コウと出合つてから//コウファイア以外のアクションを見たことがない。

「」の質問は疑問といつより興味に近かつた。

「みゅみゅーう 後の一いつは//コウアタックと」

氣落ちを瞬時に取り戻し、//コウが満面の笑みで説明を始めよつとした矢先、リグレットは周囲のある異変に気付いた。

「 ちょっと待て…… 湖の様子がおかしい」

普段は穏やかな水流の湖が、今は何故か大きく波打っていた。

水源は海や川に繋がっていないので魚など海洋生物はいなはず……いや、居たとしてもこの波打ちの大きさは異常だった。

リグレットは湖の底を凝視する。

透明な湖の底を満遍なく、異常な視力を誇るブルーの瞳が異変を隈なく探す。

そして 見つけた。湖の中に徘徊する小さな影……

影は徐々に近づきながら浮上してくる。そして

湖からザバアっ大きな水しぶきが立ち、その音源の中心から大鱗に覆われたアイスリザードが水面に姿を現した。

『魔物が出るはずのない』と説明された矢先に出没したこのトカゲみたいな外見の魔物、アイスリザードだ。

アイスリザード オールドラントでは主に北方に生息する獣型の魔物であり、パワー、防御、回避、全てに至って普通。ブレスも使ってくるが、それも注意さえしていればさほど怖くはない。特に突起して優れている能力があるわけでもない。

つまり、酷い言い方をすれば

「……雑魚ね」

リグレットが本人（？）を田の前にしながら思わず本音を漏らす。アイスリザードより何倍も戦闘能力に優れたレプリカナイトの大群を退けたミュウ達に取つて、今更こんな普通の魔物……それもたつた一匹に遅れをとるはずがない。

その証拠に戦闘慣れしていないミュウですら平然としていた。

「グルルッ！？」

リグレットの『雑魚』発言に怒ったのか、アイスリザードの威嚇を含んだ視線が彼女達に注がれた。

どうやら人間の言葉を理解出来る利口なトカゲ　じゃなくて魔物らしい。

「確かにアイツは炎が弱点のはずよ、ミュウ、やつちやいなさい」

雑魚相手に自分が動くのは気が進まないのか、リグレットはミュウに命令を下した。気分は正にポーモントレーナー。

「了解ですの～」

リグレットとは対象的にノリノリなテンションのミュウ。

リグレットに頼りにされたこと、自分が戦闘の足手まといになつ

ていないこと、それらがミユウに取つてとても新鮮で、非常に嬉しことでもあった。

「ユウは一步前に出ると、リングの力を引き出すため黙想しながら集中する。

すると、徐々にリングの全体が、そしてヒュウの身体が真っ赤に変色した。

力強い言葉と共に、リングに溜め込んだ力を一気に解放する。

「（相変わらずとんでもない威力だな）」

炎が放たれた瞬間、リグレットは改めてミコウファイアの迫力に感嘆した。

「これはミュウ自身も気付いていないことだが、彼がリングの力を使う度にその威力は増している。これはミュウがリングの扱いに慣れてきたことを意味しているのだ。

そんなとんでもない威力の炎が真っ直ぐアイスリザードの方へ走っていた。

レブリカルーンですら瞬時に炭と化した必殺ファイア、炎が弱点
なアイスリザードなら当然同じような結末を迎る……一人がそう確
信し、気を緩めたその時

ピカッ!!

アイスリザードの眼前で『何か』が光を放つた。

そして……

「なっ！？」

「みゅみゅっ！？」

炎がアイスリザードの眼前で突然方向を変えた。

そして向きを変えた強大な炎は再び真っ直ぐ走り始める。

ミコウファイアはアイスリザードの眼前で『何か』に反射され、
方向を変えたのだ。

向きを変えた炎が走るその先には、予想外の事態に驚愕し、硬直
したままのミコウとリグレットの姿がそこにあつた。

第1-2話 湖の戦い（後書き）

見てくれてありがとうございます！

書き方は前回と同じ行間を開ける方式でした。

ただ設定で行間を自由に弄れるみたいなんですね。

やり方わから
ないです。w

第1-3話 魔弾無効（前書き）

今日はちょっと短い……かな？

キリを良くするために本文2000文字程度です。

第13話 魔弾無効

「くっ！ あ、危なかつた……」

跳ね返ってきた大火炎を前に呆気に取られていたリグレットだが、自我を取り戻した刹那、瞬時に身体が回避行動を起こしていた為、ギリギリの所で火炎の範囲外へ脱出することに成功していた。

「はっ！ そうだ……ミュウー、どじだ！？」

自分の他に、もう一匹あの大火炎に巻き込まれた者がいることを思い出したリグレットは、顔面蒼白になりながら必死にその姿を探した。

しかし、その姿はそこにはなかつた。

最悪の展開が彼女の脳裏に過ぎないとしていた。

しかし

「みゅうう……」「へへへで～す～の～」

姿が見えないのに声だけはした。

声の発端となる場所を探してみると、その声は空からしてくることに気が付いた。

そして、空を見上げたリグレットは一瞬の自分の眼を疑つた。

「お前……空を飛べたのか！？」

彼女の視線の先、そこには大きな耳を翼代わりにして大空に羽ばたいているミュウの姿が在った。

「みゅみゅーう ミュウアクションの一つ、『ミュウウイング』ですか〜〜」

大火炎が反射されて自らが巻き込まれそうになつた時、彼は何時かと同じように慌ててミュウウイングを広げ、大空へ脱出していた。

「（なるほど、ソーサラーリングの力の一つか。それにしてもあの状況で瞬時につなこまで移動するとは……常人では考えられない退避スピードだな）」

ミコウの判断スピードと退避能力に素直に感心するリグレット。

ちなみに常人では考えられない退避スピードなのはあなたも一緒ですよ、リグレットさん。

「リグレットさん！ 危ないですの〜！」

上空浮遊していたミュウが、突如大声でリグレットに注意を促した。

見ると、アイスリザードが吐いた氷のブレスが、リグレット目掛けて真っ直ぐ飛び放たれていた。

だが、彼女はそちらに目もくれないまま、サイドステップで軽く回避する。

そして振り向き様に、彼女は次の行動を起こしていた。

バンバンっ！

リグレットは敵の対面に視線を移すと、瞬時に二丁の譜業銃を取り出し銃弾を放った。

跳ね返されることを警戒してか、アイスリザード正面から少し角度を付けた位置から銃を放つ。

パリンパリンっ

「……っ！？」

跳ね返されたと思われていた銃弾は、アイスリザードの眼前でガラス版が割れたような音を立て、そのまま失速して湖の水面にプカンと浮かんでいた。

「「……？？」

完全に攻撃を無力化されるといつこの訳の分からぬ状況に、ミコウとリグレットはただ困惑するのであった。

バンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバン
つ！

リグレットの早撃ちで、数十発の弾道がアイスリザード田掛けて飛び放たれる。

これだけ撃つても球切れしないのが不思議で仕方がない。

パリンパリンパリンパリンパリンパリンパリンパリンパリンパ
ンつ！

彼女が放つた弾数だけ、ガラスの割れるような音が鳴り響き、結果として湖に弾丸が浮かび上がる。

しばらくそのやり取りを続けていたリグレットは一区切り付けると、大きくため息を吐き、両手に構えた譜業銃を腰にしました。

そして上空浮遊していたミュウに呼びかけた。

「……ミュウ、降りて来い」

「みゅ？ わかりましたですの」

突然指名が掛かり、急ピッチで彼女の元へ降り立つミュウ。

そしてちゃっかりリグレットの頭の上へと綺麗に着地した。

「とりあえず、奴への攻撃無効化と火炎反射について少し分かったことがある」

「みゅつー？ すじいですの～、さすがリグレットさんですの～」

などと言葉を交し合っている間にも、アイスリザードは湖の水面から氷ブレスを吐き続けている。

リグレットは余裕でサイドステップやバックステップなどを多用し、ひたすら避け続けながら話を先に進める。

「水面に弾丸と共に浮かんでいるガラスの破片……恐らくアレが火炎を跳ね返し、銃弾の威力を相殺したタネだろ？」

湖に視線を移すと、確かに水面には銃弾の他にキラキラ光る破片のようなモノが浮かんでいる。

おかげで透明感漂う綺麗な湖に、大量の不純物が浮かび上がるという結果を招いていたりするが、今更そんな細かいことを気にするような一人ではなかつた。

「譜術を用いた攻撃では反射されるのがオチだが、銃撃のような物理攻撃であれば、あのガラスのような盾を壊すことが出来るらしい……だが壊しても壊しても奴は無限にガラスの盾を量産する

リグレットの早撃ちにも遅れを取らない量産スピード。

これではいくら発砲してもただの弾の無駄遣いで終わってしまう。

リグレットが譜業銃を納めた理由もその辺にあった。

「オマケに奴は湖から出でこない。近づくことが出来なければ奴を倒すことは不可能だろ?」

「みゅみゅつー? じゃあ、じつあるのですー?」

珍しく神妙な表情で聞き返すノコウヒ、リグレットは予想をもじていなかつた答えを返してきた。

「逃げる」

「…………ハイ?」

あまりにも予想外の答えに、ノコウヒは声を裏返しながら素つ頓狂な声を出すのであった。

第1-3話 魔弾無効（後書き）

見てくれてありがとうございました！
どうも切り処がわからず、本文が長い時もあれば短い時もあります。
次回もちょっと短い……かな？

第1-4話 蒼い結晶体（前書き）

またTOAやりたくなってきたなあ。3DSのアビスもやってみたいですね。

ハード持っていないけどｗｗ

第14話 蒼い結晶体

「そもそも私達には奴と戦う理由はない。戦つても無駄に体力を消耗するだけだ」

言われてみればその通りだつたりする。

襲われたから対処した……だが対処しきれなかつたから放置する……無責任な感じもするがそれは普通の反応だ。無理して倒す理由も彼女達はない。

なぜ音素気象密度が低いこの場所に魔物が出現したのか、そしてあのガラスのような盾はなんだつたのか、気になる所は盛りだくさんだが、今はそんなことを調べることよりも優先すべきことはある。「奴が湖から出てこないということは、戦闘では向こうが有利であるが、逆に言えば100%逃走に成功するということだ……いい加減、奴のブレスを避け続けるのも疲れてきたからな」

ため息を吐きながらも、進行形でアイスリザードのブレス乱れ撃ちを避け続けているリグレット。

奴が凄いのは防御能力だけなので、唯一の遠距離攻撃方法であるブレス攻撃などリグレットの運動神経ならば田をつぶつても避け続けられるだろう。

「みゅうう。でも魔物をあんな所に放置して大丈夫ですか？　もしミュウ達が逃げた後に暴れ出したりなんかしたら……」

「そんなこと我々には関係ない。それにここに居る者達は皆冒険者だ。今更魔物に絡まれたくらいで慌てる者もいる。といつわけでも行くぞ！」

「みゅうう……」

ミコウは多少納得のいくない表情を浮かべているが、今回はリグレットの方が正論であるため何も言ひ返せなかつた。

リグレットはサイドステップでブレスを避けながら、ゆっくりと奴との距離を取つて行く。

焦らなくとも逃走は成功すると確信しているため、リグレットは回避に集中しながら離れてゆくのが得策と考えたのだらう。

「ガルツ！？ ガルルルルルルツ！？」

ついにブレスの届かない所まで遠ざかると、アイスリザードはここで初めて2人が徐々に自分から距離を置いていることに気が付き、咆哮を上げた。

「ミコウ、奴は何て言つてゐるのだ？」

もうブレスが飛んでくる心配がないと語ると、リグレットは湖に背を向け、頭に屈座つていたミコウに質問を掛ける。

「がるるるる～、つて言つてゐるのですの～」

「……………やつか」

あえてシックリせ居れず、リグレットはそれつもつ無言のまま歩み続けた。

そして二人はそのゆづくりと湖を後に

」」？」

ふと背後から大きな水しぶきの大音が轟いた。

大音に促され振り返る二人……そして

その視線の先には、咆哮を上げながら、駆け足でこちらに突進してくるアイスリザードの姿があった。

その腹部には、青く光る球体が淡い輝きを放ちながら、奴の身体

に吸い付くように垂れ下っているのが見えた。

自分の予測を裏切った敵の行動に、嫌悪感を表情全面に表すリグレット。

……ちなみに『湖から出られない性質』って、物凄く都合の良い解釈ですよ、リグレットさん。

「まあ、そんなに足も速くないみたいだ。これなら全力で走れば逃げ」

リグレットの言葉を遮つて、不意に大声を上げるニコウ。

耳元の近い頭の上で叫ばれた為、彼女は思わず顔を顰めて耳を抑えた。

「な、なんだミユウ……いきなり大声を……」

「リグレットさん！ リグレットさん！ あの青くて丸いの//」
知っているのです〜〜！」

なぜか興奮気味なヒュウに促され、視線を敵の方に移すリグレッタ。

その先には確かにアイスリザードの腹部に浮かぶ『青くて丸い物』が在った。

「音素結晶体……か。あの色の輝きは第四音素だな、それもかなり濃度の濃い……なるほど、あんな物を身に纏つているのであれば、

音素気象密度の低いこの場所に出現したのも頷ける。あの鏡の盾もその力を借りて生み出したと考えれば納得のいかないこともない

リグレットは球体を一目見ただけで、それが音素結晶体であること、音素の種類、そして濃度まで見抜いていた。

しかし、そんな目視鑑定をゆっくり行つてゐる間にも、自分達とアイスリザードの距離はグングン縮まつてしまつてゐる。あまり悠長にしている時間もなかつた。

「タネが分かつた所でやはり私達に戦う理由などない。//コウ、このまま逃走するぞ！」

「ちよつと待つですの～！ 理由なうあるですの～！ 戰うですの～！」

リグレットが走り去らうとした時、彼女の意見に反する主張で彼女の足を止めさせた//コウ。

彼がここまで主張を強いることはかなり珍しい。

「なんだ？ その理由とは？」

納得のいかない様子のリグレット。彼女にしてみたら//コウがここまで主張する理由が分からぬ。

「あの青くて丸いのはリングに新しい力をくれるですの～。今まで何度も丸いのを発見したのですけど、その度にリングに新たな力をくれたですの～」

そう　今までの冒險の中で何度も見かけた結晶体、その度にリングに新たな譜を刻み、能力を与えてきていた。それがソーサラーリングの特徴であり、美点である。

ミコウファイアを生み出した第五音素の結晶体。
ミコウアタックを生み出した第一音素の結晶体。
ミコウウイングを生み出した第二音素の結晶体。

そして田の前に見える第四音素の結晶体も必ずやリングに新たな能力を与えてくれることだろう。

幸いにもこの世界に来た時、リングのパワーアップ化と共に、新たに三つの譜を刻める空洞が出来ていた。

つまり、あと三つほど結晶体を追加することができるという可能性が高い。

「……分かった」

リグレットがため息と共に肯定の言葉を漏らす。その言葉にミコウの表情にも笑顔が浮かんだ。

しかし、彼女の次の言葉がミコウの表情を一気凍らせることになる。

「だが、私は戦わない。新たな力を手にしたいのであれば、お前一人で戦い勝ち取ることだな」

第14話 蒼い結晶体（後書き）

見てくれてありがとうございます！
偉く中途半端な時間に更新してしまいましたが、年末年始はそんな
日が増えそうです。
休みになつても特にやることないしw

第1-5話 弱点発覚（前書き）

アイスリザード戦で全体の約1／5が終了です。
このペースなら70話ちょっとで終われるかな?
あくまでも日安ですが……

第1-5話 弱点発覚

「みゅううつー？ ミュウ一人で戦えっていつですのー！？ 酷いで
すのー、いじめですのー、動物保護法違反ですのー！」

思ひもよりぬリグレットの言葉に、ぶつぶつと不平を申したてる
ミュウ。

「私は元々戦う気はないと言つただろう。無駄な戦いは好まない。
待つていてやるから自分で何とかしてきなさい」

「みゅうううううううう

不平を申した所でリグレットから返つてくる言葉は変わらない。

今ミュウに「与えられた選択肢は一つーー

新しい力を求めて戦うか……

新しい力を諦めて逃げるか……

「ちなみに、私は戦う気はないと言つたが、逃げる氣も失せた……
といふわけでさつさと逝つてこー」

「みゅみゅみゅー？」

訂正。もはやミュウに与えられた選択肢は一つしかなかつた。

「（みゅううう。やるしかないのですのー）」

自分が言い出したこととはいえ、早くも後悔氣味な感概に浸る//
コウであった。

//コウ達がそんなやり取りを交わしている間に、自分とアイスリザードとの距離はぐんぐん縮まつてきている。

毛を逆立てながら迫つてくる奴の背景には、鬼気迫るオーラが滲み浮かんでいる。

よほどリグレットの『雑魚』発言に怒ったのだろ？。

そして、そのどばりを受けるのは//コウであり、事の根源であるはずのリグレットは隅の方で壁に背を預けて傍観するのみであつたりする。

アイスリザードは速度を落とさぬまま猛突進し、距離がゼロになると同時に//コウに鋭い爪を差し向けた。

//コウとアイスリザードのスピードはほぼ互角、しかし回避能力になると//コウに分がある。

なぜなら

「ルノアール」

高らかな叫びと共に、ミュウは大きくウイングを広げ、瞬時に遙か上空へと飛び移る。

そう ウイングを広げたミコウのスピードはあの怪鳥フレスベルグよりも上、そして空を飛べないアイスリザードは接近戦に持ち込むことができなくなるのだ。

しかし、それで戦闘を有利に運べるわけではなかつた。

「カアアアアツ！」

アイスリザードの氷のブレスが、ミハウのいる上空を目掛けて真っ直ぐに放たれる。

先程リグレットは余裕で避けていたが、ミュウには羽を大きく動かして、自らが軌道外へ逃げるのが精一杯だった。

炎を吐けば相手のブレスを相殺できる
ウの頭に過ぎつたが……彼はそれをしない。
そんな考えが一瞬ニコ

あの圧倒的な威力の炎である、ブレスを相殺どころか押し勝つてしまふ。そうなつたらあの鏡の盾で跳ね返るのがオチだ。

それにミユウはそれが出来ない理由がもう一つある。

それこそがミュウにとって意外な……そして決定的な弱点でもあつた。

「（逃げ回つてばかりでは勝てないです。何とか攻撃を……でも）」

でも譜術系の攻撃は奴の眼前で跳ね返されてしまつ。よつてファイアは使えない。

つまり、ミュウの持つている能力で奴に有効そうな攻撃手段は一つしかない。

ミコウは攻撃を繰り出す為にウイングを納め、いつたん地面に足を着ける。

同時にリングを土色に変色させ

「カアアアアアアッ！！」

しかしリングに力を注いでいる最中に僅かながら隙が生じた。

それを好機に見たアイスリザードは氷ブレスを発射せる。

「みゅみゅつ！？」

対応に遅れたミュウは、奴のブレス攻撃に避けきれないと判断し、慌ててリングの色を土色から赤色へと変えた。

「ふ、ふあいあ~~~~~つー！」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオつー！」

ミュウの口から大火炎の赤光が放たれる。

慌てて繰り出した炎であつたが、その威力はいつも通りズバ抜け
ていた。

圧倒的なミュウファイアの赤光と、普通の氷ブレスの青光が正面
からぶつかる。

結果は、溶鉱炉に力キ氷を放り込むようなものだった。

ピカッ！！

「……っ！ ういぐんぐーー！」

氷ブレスの飲み込んだミュウファイアが、奴の眼前に生み出され
た鏡の盾に当たった瞬間、ミュウは反射的にウイングを広げ大空へ
退避した。

そしてミュウの予想通り、赤光は方向を変え、綺麗に反射される。

早急な判断で大空へ退避していなければ、今更ミコウの身体は墨になつていただろう。

ミコウは空を大きく徘徊すると、再び地面に足を着き、今度は突進しながらソーサラーリングの色を土色に変色させる。

だが

「カアアアアアアアアアアアアアツ！！」

アイスリザードの咆哮と共に再び迫る氷ブレス攻撃。

「みゅみゅっ！？」

ミコウは仰け反りながら急ブレーキを施し、再びウイングを広げ大空へ逃げる。

「（……なるほどな）」

その戦いを傍観していたリグレットは、ここまで戦闘経過を見て、彼女なりにミコウの弱点を見出していた。

第1-5話 弱点発覚（後書き）

見て貰てありがとうございます！

前書きで70話ちょっとで終わるかもって言いましたが、100話超えもあり得る気がしてきました(汗)
どうかじっくり長くなることは決定ですので、どうか離れずに着いてきてくれるとうれしいです。

第16話 逃げない勇気 √Sアイスリザード（前書き）

今回はちょっと長めかな。

区切り方が下手で長くなったり短くなったりして申し訳ないです。

第16話　逃げない勇気　VSアイスリザード

「（ソーサラーリングは一度に一つの能力を同時に発動させること出来ないみたいだな。それにあの臆病な性格が災いして戦いの視野を狭めてしまっている）」

前者は仕方ないこととはいえ、後者の弱点は深刻だった。

戦いの視野を狭めるということは、無限に在るはずの戦術を有数に限らせてしまうことを意味していた。

ミコウファイアは単なる遠距離攻撃として……

ミコウアタックは単なる近距離攻撃として……

そしてミコウウイニングに関しては単なる攻撃回避だけにしか用いていない。

相手が低能魔物ならともかく、ある程度知能を持った敵が相手となるとワンパターンの戦法は命取りになる。

まあ、それでも超一流以上の力を持つていないと今のミコウの相手は勤まらないだろうが……。

それに増してあの臆病な性格もいけなかつた。

敵のブレスなど大した威力もスピードも無いのだから、先ほどのリグレットみたいに左右前後のステップを用いて交わせば良いものの、ミコウは敵の攻撃に過敏に反応してしまい、つい安全圏の大空

へと逃げてしまつ。

「Jのままでは永遠に勝負が付かないと感じたリグレットは、Jで一つ上空に居る//コウにアドバイスを送る。

「//コウ… ウイングを逃げにばかり使つなー リングの力を信じ、そしてもつと頭を使つてみる」

「みゅつー? 頭を使つ……ですか? ……むむっ……」

「(しまつた。言葉を間違えたか……?)」

『頭を使え』 それは//コウには一番求めては行けない」と。

後悔するコグレットを余所に、すでに投げられた言葉はじっかりと//コウの脳に届いてしまつていた。

「ウイング……逃げない……リングを信じる……頭を使つ……みゅみゅつー…」

//コウなりに必死に思考を重ねた結果、一応彼なりな答えを導き出せたみたいである。

そしてその答えを元に、彼は一つの策を練り上げる。

//コウが考案した作戦 それを実行しようと田を輝かせる彼を見て、不安になるのはどうこうじだらう。

そんなリグレットの不安と心配を余所に、上空に居る//コウは作戦を実行する為、アイスリザードの真上の位置へと移動するのである

つた。

上空で田標を定めたミコウは、意志を固めるため默想をする。

「（逃げない……逃げない……逃げない……）」

リグレットの助言その一、『ウイングを逃げに使わない』。

今までに逃げにしか使っていなかつたミコウウイング

そう、『逃げ』に関しては使いこなせたのだ。

つまりそれは能力を使いこなせるという裏付けとも取れる。

むしろ余計な杞憂を取り除き、自信に繋がっていてもおかしくない。

「カアアアアアアアアアツ！…」

だが默想中はあまりにも隙だらけだった。それを好機と言わんばかりにアイスリザードが氷ブレスを発射させる。

田標に向かつて真っ直ぐ進む氷ブレス、威力はないが命中に relate ては正確だった。

だが、ここで黙想を終えたミユウの目が開いた。

以前の臆病さが感じられない、『戦う者』の眼光は鋭く眼をしていた。

ମୁଣ୍ଡିର କାହାର ପାଇଁ ଏହାର କାହାର ପାଇଁ

気合一閃、ミユウの咆哮が天空に木霊する。

そして、ミュウは目標 アイスリザードだけを見据えて真っ直

卷之三

だかる。

「（リンクの力を信じる）……リンクの力を信じる……リンクの力を信じる」

リグレットの助言その一、『リングの力を信じろ』。

リングの力を疑っていたわけではなかつた。ただミュウには実感がなかつただけなのだ。

圧倒的な力を手に入れたという実感が……

だからミコウは信じてみることにした
と確信していた。

なぜなら、自分はソーサラーリングの主なのだから……

ପ୍ରକାଶନ କମିଶନ ରୁ. 100/-

氷ブレスを目前としたミコウは、眼前に迫りつつあるブレスをなんとか交わしもせずにそのまま頭から突っ込んだ。

「このミュウの自殺行為を見て、アイスリザードは勝利を確信したかもしない。

卷之三

だが次の瞬間にアイスリザードが目にしたのは、鬼気迫る表情をしたまま平然と突っ込んでくるヒュウの姿だった。

ミュー ウィングは本来第三音素
つまり『風』の力を借りて発
揮される能力である。

つまり、フルスピードで飛んでいるミコウの正面には大気の風が膜を作っていた。それはまるで風の渦巻が変異して、ミコウ底う『盾』を作っているようにも見えた。

そしてこの風の盾は雑魚魔物の氷ブレスなどでは敗れはしない。

以前アザゼルのフレイムバーストを受けても、耳を多少焦がす程度に済んだ理由もその辺にあつたのだ。

敵の攻撃を退けたミュウの眼には、もはや自分の倒すべき相手の姿しか見えていなかつた。

「（頭を使つ……頭を使つ……頭を使つ……）」

リグレットの助言の二、『頭を使え』。

これは言わざともなく、『もつと考えて戦いに臨め』という意味だが、プチトマト脳のミコウ（酷）はとんでもない思い違いをしてしまう。

「みゅううううつーー！」

氷ブレスを跳ね除けたミコウは決意の咆哮を上げながら、フルスピードで真っ直ぐ目標に向かって突進する。

ミコウはスピードを緩めるつもりなかつた。このまま突進する決意を秘めているのは彼の鋭い目を見れば一目瞭然だ。

アイスリザードもそれを察してか、鏡の盾を生み出し重ねる。それも何重に……短い時間の中で量産できるだけの数を……

そして

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ンっー！

ミコウとアイスリザードの位置がゼロになると、耳鳴りがするく

らこの轟音が辺りに鳴り響いた。

スピードを味方につけ、凄まじい威力を生み出した風の盾。物理攻撃に対しても素晴らしい強度を持つ鏡の盾。

「」の一いつの盾同士が衝突し、一匹の姿を隠すほどの砂煙が昇る。だが立ち上る砂煙の先には、無常にも無傷のまま地の上に立つアイスリザードの姿があつた。

たつた一枚でも、リグレットの銃弾一発の威力を相殺するくらいの強度を誇る鏡の盾、それを何重に重ねられたのだ。いくら渾身の突撃と言えど、それをやぶることなど不可能

そう思われていた矢先だった……

ピシッ……ピシピシ……ピシピシピシピシッ……

「…………」

鏡の盾の外郭から徐々にヒビが内側の鏡へと侵食してゆく。

そして

ガシャ~~~~~ン!!

完全傷物と貸したガラスの盾は、ただのガラス片となつて地に散らばつた。

アイスリザードは地に散らばるガラスの破片を見て、驚愕と恐怖で身体を硬直させる。

しかし、その瞬間にもヒュウは次の行動を起こしていた。

」
...
○！？

アイスリザードが慌てて振り返ると、そこにはリングを同色に身体全体を土色に染めているミコウの姿が在った。

慌てて鏡の盾を再度量産しようとするが遅かつた。

ドガツシャ~~~~~ンツ

! ! !

先程よりも大音量の轟音が辺りに響いた。

見事にクレーターと化した地面、立ち上る砂煙、そしてその奥に立っているのはミュウ。

『ミコウはリグレットの助言通り、『頭を使った』突進で敵の盾を打ち碎き、『頭を使った』アタックで見事アイスリザードの息の根を止めた。

そう 『ミコウに取つて『頭を使つ』 = 『頭突き』と方程式が組み上がつてしまつたみたいなのだ。

「（意味が違うのだが……）」

戦いを終止見届けていたリグレットは苦笑を漏らしながらも、『ミコウの戦いつぶりに感嘆していた。

『ミコウに取つて初めての戦いは、ハイレベルの名勝負を経て、まさに意味のある勝利で締めくくる』ことが出来たのだった。

「や、やつたです、……の……」

『ミコウは勝利を確認すると、そのまま頭を回しながらフランフランと背中から倒れる。

存分に『頭を使って』しまつた為、脳が振動されてしまい、視界がグルグルして定まらないのだ。

だが地面に倒れこむ前に、いつの間にか傍へと歩み寄つていたり グレットがミコウの身体を支えた。

「荒業ばかり使つかうひつなるんだ。もつと頭を使えと言つたのに……」

「…………みゅうう？ もつと//ミコウアタックを多用すれば良かつたですかの～？」

「…………いや、そういうことではなく…………まあ、いいわ…………」

深いため息と共に、彼女はアイスリザードの残骸の方へと視線を移す。

そこにはペチヤンコになつた奴の側に、アレだけの衝撃を受けても無傷のままの第四音素結晶体があつた。

青々と輝きを放つ音素結晶体、リグレットはそれを素手で拾い上げると、ミコウの両手にそれを持たせてあげた。

「勝利の結晶だ。今のお前ならこれを受け取る資格がある

「…………みゅう…………ありがとう…………ですの…………リグレットさん…………」

力のない返事、だがミコウの表情には満面の笑みが浮かんでいた。今、彼の胸の中は達成感でいっぱいになつていてことだらう。

//ミコウが青色の第四音素結晶体を受け取ると、ソーサラーリングが新たな力を求めるかのように結晶体はミコウの手から離れ、静かにリングの中へと吸引されて行つた。

そして、ソーサラーリングに新たな譜が刻まれる。

〃コウは自身の力で、新たな能力を勝ち取ったのだ。

「……みゅう、やつた……ですの～……そくどんな能力か…
…」

新能力がどんなものなのか、さくそく使って試そうとするコウ
だつたが、やはり視界が定まらず、とともに地面上に立つことすら出
来なかつた。

「軽い脳震盪だ、少し休めば治るわ。それまでリングの力は使わな
い方がいい」

「みゅう……」

心から残念そうな表情を浮かべるコウ。

しかしリグレットの言ひとおり、軽い脳震盪を起こしてこのコ
ウには安静が必要だつた。

「今は身体を治すことだけを考えろ。モーヴまでは私が運んでやる
から、お前はグミでも瞼みながら寝てなさい」

そう言いながらコウを抱っこし、楽な体制を作ってくれるリグ
レット。いわゆる『お姫様抱っこ』に近い体制だ。傍から見るとか
なり妙な光景である。

「みゅう……ありがとうございます～……やつぱりリグレットさんは
優しいですの～」

「そ……そのネタはもうこいー！　ほりひ、こへぞー！」

顔を真っ赤に染めながら歩み始めるリグレット。

ミコウは勝利の余韻に浸りながら、リグレットの腕の中で、安らかな表情を浮かべながら眠りにつくのであった。

第1-6話 逃げない勇気 √Sアイスリザード（後書き）

「スキット」 【ビーチが本音?】

///コウ「やつにえば、リグレットさん……」

リグレット「起きたのか……なんだ?」

///コウ「リグレットさんって、回復譜術を使ったような気がするで
すの~」

リグレット「ああ、戦闘ランクをハード以上で私に挑むと、レイズ
デッドを使える」

///コウ「(ハード以上ー?)…………じゃあ、何で///コウに使ってくれ
ないですか~?」

リグレット「お前は別に命に関わる怪我をしたわけではないだろ。
あの程度ならグミと睡眠で十分だ……それにあの術は疲れるし……
したのです~……」

///コウ「みゅみゅっ!~? 何だか後半の方に感情が入っている気が
します~」

リグレット「…………無駄話はその辺にして、さつとモーヴへ向
かうわよ」

///コウ「(話が流されたのですの……)」

第17話 モーグでの再会（前書き）

ここからが第一章といつたところです。
サイトの機能を使えば章分けできるみたいですが、またしてもやり方があくわからぬため普通に投稿しました。

第17話 モーグでの再会

グラム・ソウル最西端に立国された、反立憲立志建国本部『モーヴ』。

オールドランストの神殿都市ダアトを彷彿させるよつなドーム型の建物が特徴的で、何よりもこの国独自の特徴的な点が一つある。

一つは、ヴァーゲストの石造が立っていないこと。それはこの世界では違法行為であることを示している。

しかし、IJの国はあえてその違法行為の措置を施していた。だからIJの国は『反』立憲国なのだ。

そしてもう一つ、IJの国は いや、IJが本当に国であるのかすら疑わしい特徴があった。

それは

「つ、リグレットさん……あれは……な、なんですか？」

『それ』を目にした時、あのミョウカドすら額に薄ら汗を浮かべるほど強烈なインパクトを受けた。

リグレットは鎮痛の表情を浮かべ、あえて『それ』を視界に入れなじようじながら言葉を返した。

「IJの国の最高権力者 つまり女王の趣味だ。詳しくは私も知らん……知りたくもない」

ミコウが呆氣を取られている視線の先、そこには全体がピンク色に配色された巨塔が聳え立っていた。

それだけでも異様な雰囲気がふんふん漂うのだが、極め付けに巨大なハート型のオブジェに『よ・う・こ・そ』とメルヘンチックに象られた文字のネオンが光つており、その下には恐らくこの国の女王であろう人物の等身大オブジェボードがワインクをしながら、『女王シリヴィアちゃんがキミを待っている』とこれまたネオンの噴出しを使った訳のわからない広告塔が立っていた。

「」の少女趣味全開の雰囲気にはさすがにミコウも引き気味である。初めて来た人は絶対にここを国とは思わないだろう。カジノか怪しい店のどちらかと勘違いする人はきっと少なくない。

「ああ、入るぞ」

「」に入るのですー!?

身体全体に拒否反応が進るようなピンクの城。そこに入るということはかなりの度胸と勇気が必要だ。

「大丈夫、中は外見に比べるとまともなものだ。外見に比べると……だが……」

激しく不安を『』えるよつなリグレットの言葉。その言葉の真意は、恐らくミコウの思っていることと一致するだろ?。

「目がチカチカしそうですの」

愚痴をこぼしながらも『ミコウはしふしふと城の中へと歩みを進め
た。

そして一人が城の中へ第一歩を踏み入れた、その時

「おおっ、リグレットか！ 隨分と遅かつたではないか

「あれ？ 後ろにいるのは……『ミコウではありませんか！？』

突然、正面から掛けられた二つの声。

しかもその内の一つは、リグレットも想定外な人物のものだつた。

「ラルゴか。いろいろあつて遅くなつた。それより、そのそちらの
お方は……」

「みゅみゅう！？ もしかして……イオンさんですの！？」

一人を出迎えてくれた声の正体は、リグレットと同じ六神将の一
人だった黒獅子ラルゴと、かつてミコウ達と旅業を共にしていた導
師イオンの姿がそこに在つた。

ローレライ教団の教団兵『神託の盾騎士団』の幹部『六神将』の
一人。通称『黒獅子ラルゴ』。

二メートルを越す巨漢で大型の鎌を振るい、六神将の中でも屈指のパワーの持ち主。

昔は傭兵業を営んでいた彼、本名をバダックと言うのだが、とある理由を元に傭兵を脱退。その後黒獅子ラルゴと名を変え、ローライ教団兵へ入隊した。

……決してキヤラが薄いとか、人気が微小だとか、技が少なすぎだとか、物語の後半は使者や立会人といったパシリみたいなことばかりしていたとか、バダックと言う名のままだつたら絶対一般兵で一生を終えそうな貧相な名前だとか、思っていても言つてはいけない。

モーグでラルゴと合流することはリグレットから訊いていた。

しかし、もう一人の人物の登場は想定外であつた。

「なんでミュウがこの世界に居るのですか？……ハッ、まさかルークに散々いじめられたのが原因で、ついに自害を…？」

心中の仰天人物は、その発言も仰天的だった。

「（ついに……つて、いつかは自害すると思っていたのか？　この人は……）」

イオンの天然ボケに心中でツツ「ミミが調和するリグレットとラルゴ。

かつて共に旅をした仲間の中に、ローライ教団の『導師』

つまり最高指揮者であり、教団の最高重要人とも言える人物が居た。

それがこの大ボケをかました少年　　名をイオンと言つ。

布石から未来を読み取る　　『預言』を読むことが出来る事で、オールドラントでは世界の象徴的に奉られていた。

だが、彼もミュウの主人ルークと同じくレプリカと呼ばれる存在であった。

イオンレプリカは数人存在していたと言われるが、彼はイオンレプリカの中でも『必要とされるレプリカ』として重宝されていた存在なのだ。

普段は大人しくまつたりとした性格の持ち主だが、不意にこちらが予想もしていなかつた大ボケをきますことがある。今みたいに……

童顔で可愛らしい顔立ちから、彼を女性と勘違いする人も少なくないだろう。少なくとも作者はそうだった。

「みゅううつ！」「主人様はミュウをいじめたりしないですか～！
せいぜいミュウの耳を掴んで振り回したり、寝ている間に口いつぱい砂利を詰め込められたりされる程度で、いじめられたことは一度もないですの～！」

「（それはいじめられていると言わないのか！？）」

元祖ボケ奇才のミュウ。さすが元祖だけあってイオンのボケに自らもボケで返すという高等技術を使ってきた。

リグレットとラルゴは、一人のボケっぷりには終止心中でシッコ
まずはいられなかつた。

なぜイオンがここにいるのか、そもそもミコウをモーヴに連れて
きてどうするつもりだったのか、ラルゴの人気の無さはどうにかな
らないのか……気になることはたくさんあるのだが、とりあえず女
王へ報告するのが先だといつことで四人は謁見の間へ通された。

広々とした空間、日当たり位置を計算された四角い窓、高級感溢
れる王座

まともな所を上げると、そんな所しか思い浮かばないような
謁見の会場だつた。

部屋全体を埋めるカラフルなオブジェの数々 ピンクの絨毯、
金のカーテン、七色に光る電灯……

これだけで非常識極まりない目触りな部屋模様だが、それ以上に
常識が欠落していると思える箇所はごまんとある。

なぜか王座の隣に山済みされてある女性雑誌の山……

なぜか謁室の隅に置いてある、プリート俱楽部と同等な物と思わ
れる音機関の存在……

なぜか謁室の壁に貼られているイケメンポスターの数々……

一言で言つと、完全私物化されていた謁見の間がミコウ達の前に広がつていた。

リグレットは先ほど、城の中は外見と比べると派手さは薄れていると言つた。だがこの有り様は……

「みゅううつ、リグレットさん、うそつきですの～。絶対に外見より中の方が凄いですの～」

この場にいるだけで眩暈を起こしかねないカラフルな物々、はつきり言つて目障りなことこの上無い惨状だつた。ミコウなんか本氣で目を回し始めていた。

「……いや、私が前に訪ねた時はまだまともなはずだつたのだが……おいつ！ シルヴィア！ なんだ、この有り様は！？ というか、謁見の間で寝転がりながら雑誌を読むな！」

「あれ？ リグレット？ 帰つてたんだ。おかえりなさい」

謁見の隅に寝転んでいた女性がゆっくりと立ち上がり、リグレット達に笑みを向ける。

清楚な顔立ちの青い長髪の美人　いや、『可愛い』と言つたほうが適切かもしない。

女王というわりには容姿が若い。幼さすらも少し漂つ。もしかしたらリグレットよりも年下なのかもしれない。

髪の色と同色のドレスが良く似合つている。城の外郭に建つていたピンクのオブジェに描かれていたのと同じ人だ。

「おかえりなさい……ではないだろう！ また謁見の間を私物化して……使用人達もなぜアーヴィングの暴走を止めない！？」

「「「無理です。私達が何を言ったところで女王様の暴走は止まりません」「」」

見事に口を揃えて言葉を連ねる使用人の方々。

諦めに満ちた表情までシンクロしている辺りが虚しさを大いに募らせている。

「みゅううつ？……この人が女王さ

— ३ —

シルヴィアと呼ばれた女性がミュウの姿を視界に入れると、なぜか目を輝かせながら猛突進で迫ってきた。

シルヴィアは妙な奇声を上げながら、ヘッドスライディングでミュウの身体をガツチリキヤツチする。

そして、ぎゅううつと締め付けるようにその身体を抱きしめた。

「あれ、今、何、?」
……………

ミュウにしてみれば、もう何が何だかわからない状態。

女王が急に突進してきたと思うと、次の瞬間には彼女の胸の中埋もれているのだ。

驚くよりも先に、戸惑いが先行している現状だ。

唖然とする三人を余所に、女王シルヴィアは所構わず本能のままに自分の頬をミユウの頬に擦り寄せる。

「可愛い可愛いか～～わ～～い～～い～～つ！ ねねねっ、この子どうしたの？ お土産？ あたしへのお土産だよね？ お土産だつたらありがたく受け取るよ」

「……はあ」

リグレット、ラルゴ、イオンの三人は、実に予想通りだったシルヴィアの暴走っぷりに、ただ頭を抑えながら、ため息を吐いて呆れ果てるのであった。

第17話 モーグでの再会（後書き）

見てくれてありがとうございました！

『シルヴィア』もこの小説のみのオリジナルキャラクターでござります。

しかし、この名前を見て、「んん？」と思つた方はかなりの玄人ＴＯAプレイヤー。

第1-8話 導師守護役（前書き）

そろそろ前書き、後書きで書くことが無くなってきたかも（汗
小説本文だけを投稿する回もあるかもしません。

「まあ…… そうだな…… 私が樹海の虫でハリウと出合った時のことから報告するわ」

とりあえず謁見らしさを齎すため、シルヴィアは王座に、リグレット達三人はその対極に立つことにより落ち着くことができた。

シルヴィアが『王座は材質が固いから嫌』という理由で散々駄々をこねたが、彼女に『ある物』を渡したら、一転して素直に聞き入れてくれた。

「うんうん」

「……………みゆうひうる」

『ある物』　いや『ある者』＝ミコウがシルヴィアの膝元でいじり倒されているが、リグレットは気にせず報告を続けた。

「ヴァーゲストの側近と見受けられた、黒い装備のデーモン族の男を見掛けたので、私は奴の後を追い、動向を探ろうとした」

卷之二

「みゅうう。シルヴィアさん、そろそろ離して欲しいですの〜」

「だめ まだまだ離れないんだからあ……あつ、リグレット続けて続けて~」

明らかに続けにぐい雰囲気である。

……とこうよつシルヴィアは本部レコードの報告に耳を傾けてこのかすら不安を憶える。

「（リ）ほんつー…………すると奴はミコウの腹に付いているリングを狙つていたようなので、私は奴にリングが渡るのを拒める為、ミコウごと連れ去つて逃走したのだ」

「な～るほど～」

「シ、シルヴィアさん……あんまり首筋は障りないでほしいですの」

「あははっ、ミコウちゃんつてば首弱いんだあ…………うつうつ～あ、気にせず続けて続けて～」

…………どう対応すれば氣にせすて居られるのか、ぜひとも彼女に問いたいところである。

しかし、終止符じり倒されてこるミコウの待遇に比べると、そんな疑問などとても底細な事だと思えてしまった。

「ミコウと共に樹海を抜け出した後、我々はフリーダムという都市に立ち寄り、酒場に居た情報屋からガーラゲストの動向について探つた。そこで一つ氣になる情報が手に入った」

「氣になる…………といえど、ミコウちゃん。首輪とかしてないよね～、もしかして野良かな？」

「みゅううつー……ミコウをペチト扱いしないでくださいのですの～！」

それにミュウにはちゃんとどこの主人様が居るですか？」

「なあ、んだ、ざんね、ん。ご主人様が居るんじゃ仕方ないけど……もし気が変わつたらあたしが飼つて上げるからね…………あつ、
気にしないで続けて続けて」

「」これが気にせず口に出されるかあああああああああああああああつ！

シルヴィアの煮えくり返る態度に、リグレットとラル「は今まで溜め込んでいた分も一緒に発散するかのように、魂のこもったツッコミが謁見の室間に大きく響いたのだつた。

「ま、まあまあ……一人とも落ち着いて……シリヴィアも真面目に聞いてあげてください」

結局イオンが抑制の言葉を掛けて、やや興奮気味だつたリグレットとラルゴを落ち着かせた。

一時騒然としていた室内も再び静寂が取り戻す。

「むう、イオン君、まるであたしが話を聞いていなかつたかのよう
な言い方をするんだね」

軽くイオンを睨みながら大きく頬を膨らますシルヴィア。

」の反応にイオンは焦りの表情を浮かべながら、両手を前に突き出し、首を左右に振りながら否定の意を促す。

「えつ！？　い、いえ、僕はそんな……」

「（実際聞いていたかどうか怪しいものだがな）」「

さすが六神将の中でシッコウを担当していた一人（作者の勝手な偏見が入っています）。心中のシッコウも見事に同調している。

「つまり、リグレットは樹海でリングを狙っていたミュウちゃんを助けて、そのまま森を脱出した。そしてフリーダムの酒場で気になる情報を手に入れた……ほら　ちゃんと聞いていたでしょ？」

「（…………って、本当に聞いていたのか…）」「

聞いていたらいで今度は妙な腹立たしさが混み上げてくる。

しかし、相手に非が無いとなると何の反論も出来ずにいたシッコウ担当の一人大つた。

「や、それでリグレット？　気になる情報とこりのは？」

場を静めるのはイオンの役目なのか、再び騒然としそうな雰囲気だつたのを、話を戻すことによつて事前に抑えることができた。

どこか釈然としないところがあつたが、リグレットは再び冷静を取り戻し、報告を再開した。

「あ、ああ。昨日のことらしいが、私達の知人がリームにて、リンクについて探つていたらしいことが分かつた」

「知人……だと？ 僕も知つてゐる者か？」

今までツツコミにしか言葉を使つていなかつたラルゴが、ここで初めて険しい顔を施しリグレットに質問を掛けた。

リグレットはちらりとラルゴに視線を預けると、小さく頷いて答えた。

「その者は、ヌイグルミを抱いた十歳くらいの女子供で、ライガとフレスベルグを引き連れ、桃色の長髪に黒い導師服を着ていたそうだ」

「…………つ！？」

その言葉を受け、イオン、ラルゴ、そしてミュウまでもが驚愕で顔を引きつらせた。

「なになに？ どうしたの？ みんな」

『彼女』のことを知らないシルヴィアは皆の反応を見て、一人だけ頭にクエスションマークを浮かべていた。

シルヴィアの疑問を代弁するかのように、リグレットはここまで経緯から考え、ほぼ確実と取れる推測を皆の前で言い放つた。

「つまり 現在アリエッタがヴァーゲスト側に協力している可能性が高い」

ローレライ教団兵『神託の盾騎士団』の幹部『六神将』の一人、
通称『妖獣のアリエッタ』。

凶暴な魔物を使役する能力があることから付けられた二つ名だが、
彼女自身も非常に優れた譜術者であり、魔物との連携にも長けてい
る。六神将の中で敵対すると最も厄介な相手に成り得るのが彼女か
もしれない。

かつて導師守護役（ファンマスター・ガードィアン）に所属していた彼女、導師イオンに恋心を抱い
ていたアリエッタにとって、この頃はどれだけ幸せだったことだろ
うか。

しかし、そんな平穏な日々も長くは続かなかつた。

これは一部の人間しか知らなかつたことだが……ある日オリジナ
ルイオンが亡くなつてしまつたのだ。

オリジナルイオンが死去し、現在ミュウ達の前に居るレプリカイ
オンが機密ながらに導師の役職に付き、そして事情を知られるわけ
には行かないために、彼女に解雇処分を下した。

彼女に事情を話しても良かつたかもしれないが、イオンがレ
プリカだと知り、一番悲しむのは彼女だろうという考え方から、何も
伝えず解雇という苦渋の決断を下したのだ。

彼女にとつて納得の行かない部分は多々あつたが命令には逆らえない。

アリエッタは導師守護役を解任された後、ローレライ教団兵の神託の盾に入団し、幹部六神将という立場にまで昇りつめた。

しかしアリエッタは、自分の代わりに導師イオンを世話するようになった彼女の同僚とも呼べる存在、『アニス』という少女には常に憎悪を抱いていた。

なぜ、導師は自分ではなくアニスを選んだのか……どうして自分は選ばれなかつたのか……

そんなずつと懸念を抱いていたアリエッタだつたが、ある日、『決定的な事件』が起きてしまう。

それがキッカケで一人は決闘に望むことになつてしまつ。

結果は　アニスの勝利……同時にアリエッタの人生はそこで幕を閉じることになつた。

自分が恋した導師イオンがレプリカだと事実も知らずに……

「みゅうう？ ヴァーゲストさんって、あの怖い顔の石造の人ですの？」

「ああ、前にも言つたがこの世界の革命者であり支配者……そして、我々の倒すべき敵だ！」

ヴァーゲストの話題になると、なぜか途端に言葉に力の入るリグレット。

「みゅみゅつ！？ といふことはアリエッタさん、敵ですの！？」

「……そつなる可能性が高いというだけだ。確証があるわけではない……つて、お前、酒場での会話を訊いていなかつたのか？」

「酒場…………ですの？ ああ、とつても美味しかつたですの～」

「…………よかつたわね」

リグレットが情報収集をしていた間、ミコウは何をしていたのか一発で理解できる一言だった。

「 「…………」「」

そんなほのぼのムードを出している一人を余所に、イオンは険しい顔を崩さぬまづつと下を見つめ俯いていた。そんなイオンの様子をラルフは無言で眺めている。

「イオン君、どうしたの？ あつ、足元のピンク色の絨毯を氣に入ってくれたのかな？ えへへへ、それね、あたしがデザインした絨毯なの えへへへへ～」

一人、勘違い特急列車に乗つていつてしまつたシルヴィアは放つておくとして、イオンのただならぬ雰囲気に気付いたミュウとリグレットは心配そうに彼に視線を注いだ。

そして、イオンが静かにその重い口を開いた。

「もしかしたらアリエッタの敵対行動の原因は……僕にあるのかも
しません」

第18話 導師守護役（後書き）

見てくれてありがとうございます！
いつもより投稿時間が遅くなってしまった（汗
たまに加筆修正に時間がかかることがあります。

第1-9話 【回想】イオンヒアリヒッタ ? (前書き)

今日は過去最高に長いかもしません。
そしてここからじめらくイオンの回想話 もとこの「プロメが始ま
ります。

第1-9話 【回想】イオンとアリエッタ ?

「話すのか？ 導師よ……」

ラルゴは視線と一緒に言葉を向ける。イオンはそれに首を縦に振つて答えた。

「アリエッタが敵対している以上、リグレットにはこのことを聞いてもらひべきだと思します」

そう言い放つ彼の表情は真剣そのもの、まるでこれから語られる話の重さを示しているようだった。

「みゅうう……ぢりせ//コウは聞いてもらひべき存在ではないですの……」

「あたし……一応、この国の女王なんだけどな……」

名前が出てこなかつた二人は、不満を全面に出しながらいじけ始める。

「あつ、いえ、その……もちろん//コウとシルヴィアにも聞いて

」

「「」」の二人は無視していいから、ちつとも話を始めてくれ

」

「えつ！？ あつ……は、はいつ！」

//コウヒシルヴィアのボケボケ発言のせいで、せつかくのシリアル

スな雰囲気を一気に崩されかけたが、リグレットと「アルゴ」のナイフ
なツツコミによって早々に收拾がついた。

そしてイオンの口から、彼がこの世界に来てからの経緯が重々しく語られる。

「僕がこの世界に飛ばされてきた場所……そこは見渡す限り大草原で囮まれた、何も無い平野の真ん中でした」

『グラン・ソウル大陸部中枢平野』

あれ？ どうして僕は意識があるんだろう……

僕はあの時……ザレッホ火山で死んだはずなのに……

どうして僕は……起き上がる事が出来るのだろう……

「僕は……生きて いる？ どうして……」

意識が覚醒し上体を起こすことが出来たイオンは、ここがどこなのか……なぜ自分は倒れていたのかなどを考えるよりも先に、なぜ自分が生きているのかが不思議でたまらなかつた。

無意識に心音を確認したり、足はちゃんと付いているかを確認する辺りが、彼の複雑な心理を表しているようだ。

「心臓は動いている……足も付いている……僕が吸い込んだ瘴氣は……感じられない……」

つまり、今ここにいる自分は異常なまでに健康体であることを示している。でも、その現状はあまりにも不自然だった。

死に方がアレだつただけに、もう健康体な自分が存在するなんてことはありえないはず。それなのに……

「考えていても仕方ないですね。それにしても不自然なくらい静かな所ですねえ」

周りに誰もいないのに、つい独り言を発してしまつのは彼の性分なのだろう。

ピカツ！－！

「えつ　？」

不意に背後で大きな光が眩い光沢を放つた。

光は円柱状に形が成つており、そして徐々に光明は小さくなつて行く。

同時に光の形も円柱状から橢円状へと形状を変えてゆき、光は徐々に薄くなつてゆく。

光が収まつてゆくと、後光の中から桃色の『何か』が見えた気がした。

「誰か……光の中にいるのですか？」

光はどんどん微薄になつてゆき、後光の中には確實に『人』がいることが明確に見えてきた。

「…………」

光の中にいる人物は、まるで眠つているかのようにピクリとも動かない。

そして『人』を包んでいた光は徐々に霧散されてゆくように静かに消え、やがて完全に後光すらも消え失せた。

光の中にいた人間はうつ伏せになつているため顔は見えないが、その倒れている後ろ姿だけでイオンはその人物が誰なのか認識出来てしまつた。

イオンは自分の顔が蒼白になつていることが分かつた。

「…………」

光の中にいた人物が微かに呻き声を上げる。

その人物も先ほどまでのイオンと同じく、気を失っているだけらしい。

彼は何が起こったのか分からず、しばし呆然としていたが、その呻き声でハッと意識を取り戻した。

そしてイオンはその人物の名前を高らかに叫ぶ。

「アリエッタっ！ しつかりっ！ しつかりしてくださーっ！」

桃色の少女 アリエッタの名を叫びながら、イオンは優しく彼女の身体を揺らす。

「う……ううん…………えつ？」

アリエッタが小声を上げると、閉ざされていた目がゆっくりと開き、その顔に真紅の瞳が覗かせた。

「……な、なんで……？」

目を開けた先に不意に現れた片想いの相手、この不意打ちにはアリエッタも驚かずには居られない。

「気がついたようですね。よかつた」

彼独特の優しさと安心感を『える温かな笑顔が彼女に向けられる。

「……イ……イオン……様！？」

恋焦がれているアリエッタにとって、その笑顔は余りにも眩しかった。

対アリエッタ時のみイオンの笑顔は惱殺スマイルと化すみたいである。

「アリエッタ、立てますか？……って、いきなり立ち上るのは厳しいですよね……さあ、僕の肩に掴まって」

「～～～！」

真っ赤になつて俯くアリエッタを尻目に、イオンは構わず勝手に彼女の手を取り、肩に担ぐような姿勢を取り出した。

「とりあえず、人がいる場所を探しましょ。色々分からぬことだらけの時は、人に聞くのが一番ですもんね」

「（ヒベヒベ）……」

イオンの台詞にヒベヒベと首を縦に振つて賛同するアリエッタ。

イオンは氣付いていなかつたが、アリエッタはその惱殺スマイルを口と鼻の先で見てしまつた為、彼女は言葉を失うほどのダメージを受けてしまつていたのであつた。

あれから小一時間ほど何も無い平野を歩いた一人。数分してようやく歩けるようになったアリエッタは、なぜか控えめにイオンのやや後方を歩いていた。

運良く魔物とも遭遇せず、些細な会話をしながら仲良く歩く二人……といってもほとんどイオンが一人で喋りっぱなしであったが……

「あつ、街です！ 街ですよ、アリエッタ！」

田の前に建造物が見えただけで大ハシャギのイオン。喜怒哀楽の激しい人である。

「は、はいっ」

笑顔を向けられるたびに顔を真っ赤に染めるアリエッタ。

紅潮しつぱなしの顔色を隠すため、顔を俯かせているが、耳まで真っ赤なためあまり意味は無い。

「あと少しですよ。アリエッタ、がんばりましょうー。」

そう言ひと、イオンは惱殺スマイルを浮かべたまま、不意にアリエッタの手を握る。

突然手を握られただけでもアリエッタに取つては紅潮物なのに、それにプラスしてこの惱殺スマイルである。それはまさに超絶秘奥義と同等の威力を誇つていた。

そして、その不意打ち攻撃を真正面から受けてしまったアリエッタは

「～～つーー（バタツ）」

失神した。

「ええつー？　ちょ……アリエッター？　どうしたのですかつー？
しつかりしてくださいー！」

顔が紅潮したまま氣を失ったアリエッタの身体を、馬乗りになつたイオンがブンブンと揺すつて起しやうとする。

「この体制が更に彼女の氣を動転させる行為になつていることを知らずに、イオンはいつまでもいつまでも彼女の身体を揺さぶるのだった。

「…………ん…………」

本日二度目の昏迷、そして二度目の意識回復。

自分が今寝ている場所は固い土の上ではなかつた。

心地良いつかつかのベッドの上、軽く見渡して見るといじはゞいかの民家の中だということがわかつた。

「イオン様？　…………イオン…………様は…………？」

自分の現状況を確かめるよりも先に、自分が恋焦がれる相手を無意識に探していた。

しかし、彼の姿は愚か、人っ子一人の気配すらを感じない。

彼女の心中は、周りに誰も居ない不安よりも、イオンが側に居ない不安の方が強く押し寄せていた。

アリエッタは慌ててベッドから身を起し、イオンの姿を探しに行こうとする。

だが、台所の方から食器を載せたお盆を手に持ちながら、彼女が探していた相手が姿を現した。

「あつ、アリエッタ。良かつた、気が付いたのですね……って、ダメじゃないですか、まだベッドから起きちゃあ。まだ本調子ではないですから寝ていなきゃダメですよ」

お盆をテーブルに置き、イオンはアリエッタを無理やりベッドに落ち着かせ横にさせた。

「はい、お粥ですよ。料理は成れていなかつたので美味しくないかも知れませんが、一応栄養を取らないといけませんからね。食べられるだけでいいですので頂いてください」

「えつ……あ、ありがと……」
「わこまつ……イオン様……」

「こはどこののか、自分が倒れた後どうなったのか、彼がここまで運んできてくれたのか、訊きたいことは山のようにあるが、今は

彼の厚意を素直に受けたとした。

しかし、彼の厚意はこれだけでは終わらなかつた。

アリエッタの言葉にイオンは嬉しそうな表情を浮かべると、彼はお粥をレンゲに救い、彼女の口元へ差し出した。

「さつ、口を開けてください。あ～んです」

「～～つー？」

別にからかつてゐるわけではないのだが、実はこいつ見えて彼には世話好きな一面があるのだ。

一度面倒を見出したら最後まで面倒を見るタイプのようである。

「あつ、いのままでは熱すぎですよね……（ふ～ふ～）……はい、これで大丈夫ですよ～」

「～～～～つー……」

アリエッタの顔はもはや『赤』以外の色が見当たらぬくらい真っ赤だつた。

しかし、大好きなイオンの厚意を無駄にするわけにはいかない。

彼女は意を決して差し出されたお粥（イオンのふ～ふ～付き）を口に入れた。

「どうですか？　自分でも味見はしましたが中々なものでしょ～？」

味見した?

このレンゲで?

もしかしてそれって間接……

「～～（バタツ）」

「ええっ！？　ど、どうしてまた倒れるのですかあー！？　し、しつかりしてくださいー！　アリエッターーー！」

本日三回目の意識昏迷。

内一回の原因の根源である人物は、ただ訳が分からずにひたすら慌めき騒ぐのであった。

「うう～……ん」

ベッドの側にある小窓から、暖かな夕日の茜色な光が帯状になつて、アリエッタの小さな身体に注がれる。

三度目に意識が回復した頃には、完全に夕の眼が街全体を覆つて

いた。

「…………あたし…………また…………あつ…………」

ふと自分の隣に何か重みが感じられた。この場合それが何なのか、鋭い読者の皆さんなら想像が付いているかもしない。

そう、彼女の隣には、アリエッタに寄り添うようにベッドに突っ伏せるイオンの姿が在った。

「イオン…………様…………」

側で寝ているイオンの頭を滑るよつて撫でるアリエッタ。

遠慮がちな性格の為か、触っているのかいなか分からなくくらいストレスの箇所を器用に撫でている。

「…………たくさん…………迷惑掛けちゃった…………」

本来なら自分が彼を守るべき立場にいるはずだったのに……これでは逆だ。

しかし、アリエッタはそれを悔やむ気持ちよりも、大好きな相手が自分の為にここまでしてくれたことが嬉しくてたまらなかつた。

「…………うへ…………ん…………んん…………」

イオンが唸るよつな寝言を漏らすと、アリエッタはビクうと身体

を震わせ、慌ててその手を引っ込めた。

そしてタイミングを図ったかのように、イオンがゆっくりと皿を見まし上体を起こした。

「あっ、すいません……看病するつむじが僕まで寝ちゃつてございました」

ベタな展開なだけに台詞までベタになるイオン。

「あの……イオン様……ごめんなさい……あたし……迷惑ばかり」

「気にしないでください。僕こそすいません、アリエッタは体調が悪かったみたいなのに無理して歩かせてしまい……」

別にアリエッタは体調が悪くて倒れたわけではないのだが、この超絶天然男は思いつきり勘違いしているみたいだ。

「そ……そんなこと

「あつ、そつそつ。この民家ですけど、今は空き家みたいなので僕達が自由に使っていいみたいなんですよ。でも、無料で……というわけにはいきませんでしたので、明日からこの街で家賃代を稼がないといけませんが……」

アリエッタが慌てて弁明を施そうとするが、イオンは勝手に別の話を始めてしまった為、完全にそのタイミングを逃してしまった。

「『めんなさい』…… あたしのせいだ」

とりあえず謝るアリエッタ。その後イオンなら必ずいつかいつ言つと知つていながら……

「 気にしないでください。それに教会や図書館でのお手伝いなので、色々情報が手に入るかもしけませんし……元々そのつもりでしたからね。一石二鳥ですよ 」

「…………イオン様…………」

イオンの優しさに改めてオープナートされるアリエッタ。

「その為にしばらくこの家に一人で住む事になりそうですね。同居人としてよろしくです、アリエッタ」

同居
· · ·
?

二人でこの家に...

住む？

「バタツ」

本日四度目の意識昏迷。そして二連続の失神オチ……

もうここまで来ると、「コントをしているようにしか見えない一人

であつた。

第1-9話 【回想】 イオンとアリエッタ ? (後書き)

「スキット」 【回居一 口田・夜】

イオン「さあ、眠りましょうか～……つと書つてもベッドが一つしかありませんね」

アリエッタ「あつ……じゃあ、あたしがソファで……」

イオン「せつ、アリエッタ、少し詰めてください～」

アリエッタ「えつ？　えつ？　イオンさま～？」

イオン「やはり思った通り大きいベッドなので二人で楽に使えますね。ではお休み、アリエッタ」

アリエッタ「(ええ～～～つ！?)」

イオン「……」

アリエッタ「(……ね、眠れないよお～……イオン様あ)」

第20話 【回憶】 イオノヒタコヒタ ? (前書き)

「スキット」 【回題】(田田・朝)

イオノ「おせよひ」やれこめす。アリエッタ

アリエッタ「おせよひ」やれこます……」

イオノ「……？」やつましめた？「元気ないですね～。もしかしてまだ体調がよろしくありませんか？」

アリエッタ「い、いえ！そりじやなくて……その……眠れなくて……」

イオノ「あはは～、昨日はたくさん氣絶してましたもんね。眠氣も無くなってしまったのでしゃひ」

アリエッタ「(イオノ様のせいですよお～)」

第20話 【回想】イオンとアリエッタ ?

神殿都市『ライムス』。

信仰と栄光の都市と呼ばれているが、奉っているのは神像ではなく、ヴァーゲスト像。はつきり言つて、神々しさなど欠片も感じられない。

ある意味ウケ狙いのようにも見えるが、信者達は大真面目で参拝に訪れている。

その都市の居住区の一角にイオンとアリエッタが同居している民家はあつた。

「では、今日もがんばってお仕事に勤めましょー!」

「はい……っ!」

イオンの言葉に笑顔で応じるアリエッタ。

同居を始めてから、すでに数日が経っていた。

教会や図書館で仕事をしているうちに、この世界は死者が行き着く異世界であることや、ヴァーゲストという男が世界の中心人物として動いていること、そしてアリエッタを包んでいた謎の光の正体は、この世界に行き着く為に誰もが体験する移転現象であったことなど、様々なことが分かった。

慣れない同居生活に、アリエッタが失神したり、イオンが料理に

苦悩したり、アリエッタが失神したり、イオンが仕事で苦悩したり、アリエッタが失神したり、イオンが音機関扱いに苦悩したりと、前途多難な日々が続いたように見えた。

しかし、イオンの柔らかい雰囲気と、アリエッタの素直な性格が功を奏し、街に溶け込むのもそんなに時間が掛からなかつた。

そしてアリエッタの心境にある変化が見え始めた。

それは、今彼女が見せたような『笑顔』。今までの彼女を知っている人が見たら、それこそ信じられない光景と思われることだろう。そんな内攻的な彼女が自然と笑みを漏らすくらい、彼女にとってこの同居生活は幸せで満ち足りているのだろう。

「あ……あの……イオン様……？　その……手を……」

「……？　はい？　何ですか？」

「い……い……い……いえっ！　な、なんでも……ないです……」

しかし、根本的な内攻的性格は治つておらず、言いたいことがあつても素直に伝えることが出来ない所は相変わらずだった。

「……？　そうですか？　では、神殿へ　ではなくて、今日は図書館整理のお仕事でしたね。さあ、図書館へ急ぎましょ！」

「あつ……！」

イオンはそう言葉を返すと、彼女の真意を読んだのか、それともただの気まぐれなのか、不意に彼女の手を握ってきた。

「……！」

いつもは彼の気まぐれ行動に卒倒するアリエッタだが、さすがに出勤前から失神するわけにはいかず、彼女は顔を紅潮させながらも必死に悶えるのであった。

居住区と神殿下層区を繋ぐ噴水広場、いつもは静けさだけが漂うような場所のはずだが、今日はなぜかいつもと様子が違っていた。

何やら街の入り口付近で人だかりが出来ている。

不思議に思ったイオン達は近くにいた人に声をかけた。

「あのぉ～、何かあつたのですか？ 皆さんこんなところに集まっていますが……」

イオンが声をかけると、彼のユルイ雰囲気とは対照的に、その男性は非常に慌めいた表情で口を開いた。

「あ～、イオン君にアリエッタちゃん～！ 大変なんだよ～。どうやら街に魔物が侵入してきたとかでっ！」

「ええつ！？」

男性の言葉に驚きで顔を見合わせる一人。

神殿都市といつても治安を守る役人はいるだろうが、二人の性格からして素直に傍観するつもりなど毛頭なかつた。

「行きましょう！アリエッタ！」

「はい！」

「えつ？ 行くつて二人共……って、おい！ そつちは危ないって

心配する男性の言葉を余所に、すでに走り出していつた二人の耳には届いていなかつた。

街の入り口に近づくに連れて、魔物の咆哮が徐々に大きく聞こえてくる。

「……あれ？」の声……」

魔物の咆哮を聴いたアリエッタは、脳裏の奥に聞き覚えがあつた

その声に疑問を憶える。

イオンとアリエッタは野次馬を搔き分け、少々強引に街の外門へと駆けつけた。

そして野次馬の先頭に立つた一人は、襲撃者の正体に驚きの表情を浮かべた。

「ガウツ！…………きゅーん…………」

まるで犬みたいな咆哮を上げていたのは、数人の役人達に取り押さえられているライガだった。

アリエッタの目が驚きで見開かれる。

そして次の瞬間には周囲の田も気にせず、大きく声を上げていた。

「やめてっ！――」

空気が張り裂けるようなアリエッタの叫び、それを訊いた一同は、一斉にシンッと静寂を齎した。

野次馬、そして役人達が、アリエッタの方へ一斉に視線を集める中、そんな注目なども構いなしに、彼女は一目散に役人達に捕らわれかけていたライガの元へ走る。

そしてアリエッタは、役人達を睨みながら彼女は高らかにこう叫ぶ。

「この子はアリエッタのお友達……！　ライガママの子供でアリエ

ツタの大切なお友達なのっ！」

アリエッタはライガを優しく抱きかかえ、ライガ自身も彼女の優しさに答えるようにアリエッタに頬擦りを交わした。

「お友達って……」

役人達にはアリエッタの言葉と行動に、呆気に取られながら動揺を示す。

そして彼女の言葉に補足するかのように、ゆっくりと近づいてきたイオンが口を開く。

「彼女の言っていることは本当ですよ。恐らくこのライガは、アリエッタの匂いを嗅ぎ付けてここにやつてきただけでしょう。それとついでに断言しますが、このライガはアリエッタが命令でも下さない限り絶対に人へは危害を加えたりしません。断言します」

そう言つと、イオンもライガの元へ近づき、笑顔を向けながら頭を撫でた。

するとライガも気持ち良さそうに目を細め、イオンにも頬擦りを交わした。

「ですので、この子を捕らえるのは待つて頂けませんか？ それと出来ればこの子も街の中へ居れてあげたいのですが……」

ついで にしては結構無茶な注文を継るイオン。当然役人達は言葉を唸らせた。

「まあ、捕らえるのは見逃してもいいのだが……さすがに魔物を街に入れるわけには……」

当然の如く、役人の言葉から出てくるのは否定の意。といつか、ここで、『オッケ ジヤあこの子も今日から街の住民だ!』なんて言われたら、それはそれで問題である。

「そうですか……仕方ありません。アリエッタ、街を出ましょう。この子をこのまま放つて置くわけにもいかないでしょ?」

「イオン様……でも……いいのですか?」

アリエッタが今にも泣きそうな顔でイオンの顔を見つめる。

しかし、イオンは終止笑顔で

「大丈夫ですよ この世界の情報もたくさん手に入れましたし、それに借家の家賃もこの前支払いましたからね」

いつもの優しい言葉。それも偽善やたてまえではなく、本心からの言葉だ。彼の言葉にはいつも嘘偽りはなかった。

イオンはそのままクルリと半回転し、野次馬に来ていた街の住人達と向き合った。

「ということなので、僕達は街を出る」と決めました。皆さん短い間ですけど、お世話に」

「いやあああああっ! 行かないでええええっ! イオンきゅうううんん!」「

イオンがペ「リとお辞儀をした瞬間、野次馬達の女性達から悲鳴に近い声があがつた。

「「「そうだ！ 僕達の前から居なくなりでくれええええつ！ アリエッタちゃんあああああん！！」」

続いて男達の悲鳴。

そう 今悲鳴を上げた者達の正体は、密かに街で結成された、イオンとアリエッタの親衛隊だった。

その名も『イオンきゅんラブリイ親衛隊』と『アリエッタちゃん萌え萌え親衛隊』。実はこの二人、本人達は気付いていなかつたが、知らぬうちに街のアイドル的存在に祭り上げられていたのだ。

「い、いえ……しかし、街の皆さんには迷惑は掛けられませ 」

「違う！ 違うわ！ 全然迷惑なんかじゃない！」

「そうだ！ それに『ライガを街で飼つてはいけない』なんて法律はないはずだ！」

「そうよ！ ちょっとそここの役人達！ 待遇がオカシイんじゃない！？」

「そうだそうだ！ それにお前（役人）も、『アリエッタちゃん萌え萌え親衛隊』のメンバーじゃないか！ しかもお前、会員ナンバー001だろ！？ このままアリエッタちゃんが居なくなつてもいいのか！？」

「ハツ！ そ、そうだった！ 僕は忘れていた……僕はこの街の誰

よりもアリエッタちゃんを愛し、彼女の為に尽くすと誓った！
……くつ、僕はあと少しで一生後悔するところだったっ！」

「よしつー、急いで上を納得させてこよつーいや、納得せざるん

だ！ 僕達も手伝ひやー！」

「…………」

「…………アリエッタちゃんの為に……」「…………

「…………アリエッタちゃんの為に……」「…………

「…………」

啞然とするイオンとアリエッタを余所に、周囲の野次馬達は一斉に役所の方へと走り去ってしまった。

「え～っと……ど、とつあえず僕達はまだ街に居られるみたい……
ですね」

「…………え、え～っとお……はー……」

「この不可解な状況に取り残された二人は、どこか釈然としないものを残しながらも、心の底では安堵を漏らしていた。

役所の方向で大きな罵声上がっている。二つの親衛隊を中心に抗議デモが行われているのだろう。

こうなればアリエッタの旧友であるライガを街に入れる許可が出るのは恐らく時間の問題だ。

バサバサバサバサつ

そして、誰にも気付いて貰えなかつたが、もう一匹のアリエッタの旧友とも言える魔物 フレスベルグが『自分もここに居たのですが……』と言わんばかりに、大きな翼で大音を立てていたのであつた。

第20話 【回憶】 イオンヒタコトツタ ? (後書き)

「スキット」 【回題】 [十日田・匂】

イオン「アリエッタ、今日はお匂いします?」

アリエッタ「あつー……そ……その……今日は……お弁当を……作つてきたんですね……」

イオン「本当にですか!? うわあ、嬉しいなあ。では今日のお匂はそれで決まりですね」

アリエッタ「は……はい……これです」

イオン「わあつー……すいじく豪華で美味しいですねー。では早速頂きましょ!」

アリエッタ「ハイ……ビ、ビーフ……」

イオン「…………あ、あの……アリエッタ? 僕にも箸を……」

アリエッタ「あ……あ~ん……です」

イオン「もしかして、食べさせてくれるのですか?」

アリエッタ「(JJKJKK)……」

イオン「それでは……あ~ん……(もぐもぐ)……うん、とっても

美味しいですよー。」

アリエッタ「～～つづー。」

第21話 【回憶】 イオンヒアコトタ ? (前書き)

「スキット」 【回憶中の心の声】

リグレット 「(なんだ?) の憶話は.....?)」

ラルゴ 「(物凄く本題から遠ざかっている仮が.....)」

シルヴィア 「(イオン君.....羨ましいなあ.....あの年で彼女頗るん
だあ.....)」

ミロウ 「(.....ணண)」

イオン 「そして回顧! 五口田が過ぎ、こつものよひに僕達は一つの
ベッドを共用して」

リグレット・ラルゴ 「(まだ忽氣話が続くのか!?)」

第21話 【回想】イオンとアリエッタ ?

あのライガ（+フレスベルグ）進入事件から五日……つまりイオントアリエッタが同居生活を始めてから丁度一ヶ月が経つた。

ライガとフレスベルグの件だが、二つの親衛隊のあまりにもしつこい講義、テモが功を奏し、ついに役所は諦めを示し、特別に街の中への侵入を許可してくれた。

特別とはいって、そんなことが許されてしまうところが、この街の凄いところというか……終わっているところというか……

しかし、イオンが断言した通り、ライガ達は決して街の住人を襲いつたりはしなかった。

むしろ、[因]は【ライガタクシー】と【フレスベルグ航空貨物便】として、大いに街の交通手段として貢献していたりする。

そして今日もイオンとアリエッタは教会手伝い（主に雑用）の仕事を終え、神殿から出てきた。

街を茜色に染める夕の閃光が一人を出迎えてくれた。そして夕日は一人に大きな影をプレゼントしてくれる。

その夕日は、初めてイオン達がこの街に訪れた時と同じ色、同じ美しさを放っていた。

「.....」

「…………」

一人はしづかし、一人の夕陽の作る茜色の景色に魅了される。世界が違つても、夕日の美しさは共通しているようだ。

街の景色にすっかり魅了されてしまつているイオンの横で、アリエッタはそんな彼の横顔をちらちらと盗み見ながら、ある思考に頃垂れていた。

「（……イオン様と一緒に住みだしてから一ヶ月……とってもとっても幸せだった……でも……）」

でも　それは自分の気持ちであつて、隣にいるイオンも同じ気持ちだとは限らない。

それに彼女は、イオンに伝えなければならぬ気持ちがある。

それを言葉にして伝えなければ、自分はこのまま一生前へ進めない気がした。

「（…………言おう…）」

胸の奥で秘めた想い。別に伝えなくても、この幸せな時間は続くだろう。しかし、それではいけないのだ。

そして彼女は決意を胸に抱き、彼に向き合つてこう言った。

「イオン様……これから少し……お時間……いいですか？」

神殿都市ライムス、神殿上層区東部展望台。

展望台と言つても、周りには何もない平野が広がつてゐるだけなので、そこから見えるのは変哲も無い、草木や山脈のみ。

しかし、そんな味氣ない景色でも、この時間になれば話は別だつた。

夕日が当たるだけで、普段は変哲もない草木や山脈も、まるで絵画の世界のような、幻想的で美しい自然物へと変貌する。

それだけでこの展望台のムードは一転する。

それは告白あることはつゝつけなムードでもあつた。

「わあ～っ、とても素敵な場所ですね～！ 僕、知りませんでしたよ～。この街にこんな場所が在つたなんて！」

展望台の手すりまで身を乗り出して景色に感動をするイオン。

おそらく彼は、アリエッタが自分を連れてきた理由が、自分にここからの景色を見せたかったのだと勘違ひしてしまつてゐるだろ～。

それはそれで告白を逃げる口実にはなる……なるのだが、それでいいけない。

「イオン様……聞いて……ください」

おずおずとこつものよつて言葉に間を持たせながら喋るアリエッタ。

しかし、そこにはいつものような弱弱しさは感じられなかつた。

「はい？ 何でしょ～？」アリエッタ

無垢な顔で振り返るイオン。

そしてその先には真っ直ぐな真紅の瞳で、力強く自分を見つめているアリエッタの姿が在つた。

「の一ヶ月　いや、この数年間ずっと伝えたかったこと。

ずっと秘めていた想い……

生前はそれ伝える前に彼は逝つてしまつた……

もうあんな後悔をしないために……

アリエッタは勇気を振り絞り、決して彼の目から視線を反らさずに……言つた

「あたし……イオン様のことが……ずっと好きでしたっ！」

茜色に染まつた景色が、アリエッタの勇氣の輝きを映しているみたいだつた。

遠くから聞こえてくる灯台の鐘音が、イオンの内心の驚きを木靈しているみたいだつた。

大きく伸びる影が、二人の硬直時間の長さを示しているみたいだつた。

突然の告白……いや、アリエッタにとつては遅すぎたくらいの気持ちの伝達。

彼女はじつと彼の目を見つめている。たつた一言の言葉だったが、彼女の伝えるべき気持ちは確実に伝わったはずだ。

あとは　彼の次の言葉を待つのみ……

一時、驚きで硬直していたイオンだが、やがて氣を取り戻し、そして彼もじつとアリエッタの瞳を見つめた。

そして、彼の『答え』が言い渡される。

「知つていました……」

「……えつー?」

それは思いもしなかつた返答。今度は逆にアリエッタの方が目を見開いて驚いてしまう。

「あなたの『導師イオン』に対する気持ちは知っていました。そしてそれは『僕』に対する気持ちではないことも……」

「…………？」

イオンの発言は、アリエッタにしてみたら何を言っているのか、まるで分からぬいだらう。

でも次の彼の言葉が、彼女の知らなかつた真実を明確に言い表す。「あなたは確かに『導師イオン』に恋をしていました……そう、それは『僕』ではなく、オリジナルのイオンに対しても……です……」

「…………？」

声にならない悲鳴。アリエッタの表情が自然と引きつっているのが見えた。

そして、聞きたくもなかつた真実が、イオンの口から静かに語り告げられる。

「今まで隠してきていましたが……僕は、導師イオンのレプリカなのです……」

とある研究社に、被験体を元に人工的に『人』を作り出す技術が在った。

作り出された『人』は被験者の形姿が等しく、その能力までも極似する。人はそれを『レプリカ』と呼ぶ。

レプリカはオリジナルの劣化品だと豪語する人も居るが、イオンレプリカのイオンは違うように考えていた。

レプリカだつて、この世に授かった【人】なのだ。何もオリジナルと比べる必要など無い、一人の人として生きられるはずだ……と。それを証明したのは、ミュウの主人ルークと、彼のオリジナルである人物 六神将のアッシュだ。

そして、オリジナルとレプリカを別視している彼だからこそ……彼女にこう言い放つ。

「ですので……レプリカの僕では……あなたの気持ちには答えられません……」

自分がレプリカであることを卑下しているわけではない。

しかし、仕方ないことはいえ、そんな大事なことをずっと秘密にしていた自分に、若干自虐的になつてていることは確かだった。

イオンは目を反らし、アリエッタは立つたまま硬直している。

そうしている間にも日は完全に沈む。いつの間にか、街は夕から夜へと変わっていた。

さつきまで二つ並んでいた二人の影も……もう見えない。

まるで一人の心が閉ざされるかのよう』……一人の関係に終わりを告げるかのように……もう見えなくなっていた。

居たたまれない雰囲気のまま数分が過ぎる。

まずその沈黙を破ったのはアリエッタであった。

「みんなは……アニスは……そのことを……知つて……いたの？」

顔を伏せながら淡々と発せられる言葉の羅列。

しかし、今までのような敬語は一切無くなっていた。

「……はい。世間には完全極秘で通していましたが……アニスや……他の六神将達は……知つていました」

つまり彼の周りに居た人物で知らなかつたのはアリエッタだけ……そう彼女だけが

「あたしだけが……除け者だつたんだ……」

「そ、それは違います！ 僕達はあなたの為を思つて……」

「近寄らないでっ！…」

イオンが彼女の肩に手を当てようとした瞬間、威嚇するような大声を上げられて手が止まつた。

アリエッタはそのままゆっくりと展望台の出口へと歩み始める。

その後ろ姿はかつてルーク達と対峙した時に見えた負のオーラのようなもので充満されており……今の彼女には近寄り難い雰囲気すら漂わされる。

「アリエッター、ビーバー……」

「近寄らないでって言つてるでしょう……」

「…………」

内攻的な彼女にしては珍しい一喝、イオンも肩を震わせ足を止めた。

ダツ！

そしてそのままアリエッタは走り去ってしまう。風に靡かれ、彼女の涙がイオンの頬に当たった。

イオンは……追わない　いや、追えなかつた。

なぜか足が動かない。追わなければいけないはずなのに、なぜかそれが出来ない。

彼女に近寄るなって言われたから？

彼女を追つても、どう声を掛ければいいのかわからないから？

「（違ひ……）

イオンは竦んでしまった足を折り畳むよつと曲げ、そのまま手を地に付けた。

「僕が……僕が弱いから……いけないんだっ…」

悔しさと後悔に手を震わせ、そのままドンッと地を叩くイオン。

手が擦り剥けようと、血が滲んでこようと……何度も地面を叩きつける。何度も……何度も……

イオンは涙で地を濡らしながら、ずっと……ずっと……その場から動けずにいた。

そして翌日

アリエッタは、ライガとフレスベルグと共に、ライムスの街から姿を消していた。

第21話 【回想】 イオンとアリエッタ ？（後書き）

見てくれてありがとうございます！

長かったイオンとアリエッタの回想は次回で終わります。イオンとアリエッタの組み合わせは書いていて楽しかった記憶があります。マイナーな組み合せだとは思いましたがw

それとPVが10000を超えました！ 本当にありがとうございます！

第22話 【回想】イオンとアリエッタ ? (前書き)

今年最後の更新です。

このペースでいけば1月か2月には終わりそうですが。

第22話 【回想】イオンとアリエッタ ?

アリエッタ失踪から約一ヶ月が過ぎた。

そして今日も珍しく街の噴水広場には大きな人だかりが出来ていた。

今日は魔物が進入してきたとか、そういう事件の類ではない。

ライガ進入事件の時は皆驚きと焦燥でパニックに陥っていたが、今日は逆、皆悲しみに満ちた切ない表情をしていた。

その渦の中心には、荷物を纏めたイオンの姿が在った。

「「「いやあ～～～～～！ イオンきゅ～～～～ん！ 行かないでえええつ～～～」」

そう叫ぶのは『イオンきゅんラブリイ親衛隊』の方々。いつもは黄色い声援を送る親衛隊だが、今日だけはみんな目に涙を浮かべていた。

今日はイオンが街を出てゆく日、広場に集まつた人々はただの野次馬ではなく、彼を見送りに出てくれた街の住人達であった。

「皆さん、お見送りありがとうございます。今までお世話になりました」

ペコリと一礼した後、再び笑顔を向けるイオン。その瞬間、親衛隊の方々は大いに泣き崩れたという。

「でも、イオン君。本当に一人で大丈夫なのかい？ 傭兵の護衛でも雇つた方が……」

街の男性の一人が、心配そうな表情を浮かべながらイオンを気遣うのだが、彼は笑みを浮かべながら静かに首を横に振った。

「僕なら大丈夫です。だつて、この為に一ヶ月も掛けて『準備』を施してきたのですから」

そう言いながら、イオンは力強い握り拳を前に向ける。

その決意に満ちた目を見て、イオンを心配した男性も小さく笑みを浮かべた。

恐らくこの男性もイオンがこの一ヶ月も掛けてきた『準備』の内容を知っているからこそ笑みなのだろう。

「そうだつたな。今のキミなら大丈夫だとは思うが、この辺は魔物も強い。充分に気をつけていくんだよ」

そういうと男性も拳を前に突き出し、イオンの拳にトントンと当たった。

「イオンきゅーんっ！ 私達、『イオンきゅんラブリイ親衛隊』はいつまでも……いつまでも……キミの帰りを待つているからねええええええええええええええええっ！」

「うおおおおおおおおおおお！ イオンくーん！ 必ず……必ず俺達のアリエッタちゃんと共に帰つてくるんだぞおおおおおおお

おおおおおつー」「

一つの親衛隊の熱い想いがこもった言葉に見送られ、イオンは荷物を肩に背負いゆっくりとライムスの街を後に

「では、俺が導師の護衛役として買つてやつてもよいが?」

「えつ?」

街を出て行こうとしたイオンの耳に、ふと側面から聞き覚えのある声が聞こえた。

その声につられ、イオンを筆頭に、見送りに来ていた一同もそちらの一点に視線を注目させた。

そこには、意外な人物が木に背を預けて腕を組む田漢の人物が立っていた。

「(ひそひそ……「あつ、なんだ?あの男……あれで格好つけているつもりか?」)

「(ひそひそ……人型をした新種の魔物じゃないかしら?)」

「(ひそひそ……マー君、見てはいけません!)」

「うんうん……#モウ」

卷之三

巨漢の人物に対する、街の人達からの素敵過ぎる感想がひそひそ話となつて飛び交つてゐるが、無常にもそれらの言葉は全て、その男の耳にも入つてきていた。

「ラルゴじゃないですかー。どうしてここに?」

格好をつけていたつもりが人型の魔物と間違えられ、子供の視界を遮られるくらいキモがられた男　その名も黒獅子ラルゴ。

「……調査の為にこの街へ訪れていたのだが……今激しく来なれば良かつたと思つた所だ」

「ハイ？」

「いや、何でもない……それより導師よ。どうあるべき？」

「何がですか？」

素で返すイオンの反応に、ラルゴは思わずズルッと足を踏み外した。

「だから、俺が護衛についてやるかどうかって話だ！……話を全く訊いてない所は死しても変わらぬようだな」

L

ラルゴが呆れ果てた末に呴いた言葉は『イオンきゅんラブリイ親衛隊』の方々の耳にも入ってしまい、彼女達は怒声と共に、ラルゴに石を投げつける。

「つおつー、な、なんだー？」「いつらは？」

「あはは～。ラルゴ、早くも皆さんに気に入られたみたいですね～」

「お前はこの状況を見て、よくやんな言葉が出てくるな！」

「では、僕はそろそろ失礼しますので……皆さん、お世話になりました。ラルゴも久々に会えて嬉しかったですよ」

「……って、オイっ！？ 護衛の話はどうなったのだ！？ って、『ラララ～！ 僕を置いて勝手に行くな！』

後方で何やら叫んでいるラルゴは無視し、イオンは街の住人に一礼をして背を向けた。

「（アリエッタ）僕は必ずあなたを見つけ出してみせます……そして……」

イオンは遙か遠くを見据えながら、固い決意を胸に抱き、そして今度こそライムスの街を後にした。

その遙か後方で、なぜか役人に尋問を受けられているラルゴの姿が、とても印象的だつた。

第22話 【回想】 イホンヒアリヒッタ ? (後書き)

見てくれてありがとうございます。
そして来年もよろしくお願いします!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3028z/>

テイルズオブジアビス 【ミュウの異世界冒険記】

2011年12月31日18時51分発行